ソードアート・オンライン～紅葉きらめく双刃～

セウト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

過酷な現実世界を経て生きること自体に意味を見いだせなくなってしまった少年が一人
そんな中不幸は続くものでデス・ゲームと化してしまったソードアート・オンラインに閉じ込められてしまう
そもそも現実にも居場所をなくしてしまった主人公：秋だがこの世界で大事なものを見つけていく
何のために生きるのか、何のために戦うのか、それを一度はなくした少年が仲間とともに再び探すことを決意する物語

目次

一層～出会い～ ―― 1
一層～距離～ ―― 17
一層～攻略～ ―― 35
1．5層～ビーター～エクストラスキル～ ―― 58
2層～攻略・前～ ―― 84
2層～攻略・後～ ―― 118

一層～出会い～

〝彼女〟は俺に言った。

「――――」

俺は〝彼女〟の名を思い出せない、そして最後にもらったその言葉も思い出せない。分かってるのは〝彼女〟はもうこの世にいないことだけ。たしかその言葉を聞いたのは、～層で死を向かい入れようとしたあの時だったはずだ。

なぜこんなにも曖昧な物言いしかできないのかというと俺こと≪Ａｋｉ≫は今、記憶喪失中であるからだ。ＳＡＯに閉じ込められてから今日に至るまでに多くの冒険を繰り広げて、人生をなんとなく生き抜いてきた。経験も知識もこの世界にいたからこそ得られたものも色々積み上げてきた。そこまで記憶はあるのにぼんやりと頭に思い浮かべることのできる〝彼女〟に関する記憶は断片的に失われているし、彼女と生き抜いていた頃…確かに一緒にいた時間の記憶はほぼない。

しかし間違いなくＳＡＯの出来事は俺にとってのターニングポイントであり、思い出すべき大切な記憶のかけらが散った日であり、俺とあいつらに初めて出会った大切な時間であったと、のちの俺はそう語るだろう。

▽

俺に親はいない。別段神が俺という存在を作り出したというＳＦじみた話ではなくこの世にいないという意味だ。いなくなった日のことはよく覚えている。なぜならばいなくなった原因を作ったのが俺であり、また一番近くでそれを見ていたのも俺だからだ。

俺の家は裕福であったと言えるだろう。ナーヴギアを月のお小遣いだけで買えたり、ＳＡＯの初回盤を買えたあたり、そう思っている。ただ、裕福であることが幸福であるかと言われれば決してそうではない。お金があるが家の規律が厳しいだとか周りの人間に疎まれるのが不幸だとすれば、逆に何不自由なく生きてきた幸福な家庭もある。俺の家庭はどちらも該当する…いや、幸福を知っていたからこそ不幸なことに俺は耐えられなかった。つまりは軟弱者なのだ。とにかく、俺は自分の身に起きた不幸をいまだに引きずって、克服できないままでいる。俺の居場所はどこにもない…そんな気さえする。

俺は心底自分のことがくだらない人間だと思っているし、今ではそこも通り越して自分に対して関心が全くない。生きている意味が全く見いだせないでいるのだ…

▽

あたりが暗い。おそらく夢だ。ＳＡＯ内で見る夢とかどういう構造してんだ。と、おそらく世界で一人しか答えられないような疑問を持ちつつその夢を鑑賞することにする。

視界が開けた先にあるのは俺の部屋、といってもリアルでの俺の部屋のことだが。辺りには俺が息抜き名目で買った漫画、ゲーム。高そうなふかふかベッド。机には勉強道具一式が整理されて並んでいる。丁度時間は午後６時、塾の時間だ。勉強道具をカバンに入れたら、下に降りて早めの晩御飯、そして外の自転車に乗って塾まで２０分。いつも通りの日常、この生活に何ら文句もなかった。

ただ毎日、父と母が顔を合わせる時間が怖かった。二人は子供の俺から見ても仲がいいとは言えない。昔は本当に笑顔の絶えない家族であったと記憶しているが、それがかすむ程に二人は喧嘩していた。リビングに降りてきてこの光景を目の当たりにした俺は「ああ、またか…」と精神をすり減らした。いつも真ん中に立って二人を止めに入っていたのは俺の役目だったが、今ではウチの会社の現社長。父の親であるじいちゃんが常だ。

その日も「ただの日常だ」と深く考えもせずに塾に行こうとした俺は今も考えの浅はかさを呪ってやりたくなる。

▽

「なんだ…またこの夢か」

起伏の少ないまたは心のこもっていないとも言えるような声を出したのは≪Ａｋｉ≫つまりは俺のことだ。俺は感情を表に出すのが下手糞だ。というより心がそもそも何も感じないのだから感情も何も出せるモノがないという方が正しい。表現はできるが空っぽなのだ。このような性格であることは自分自身把握出来てるし、リアルでもこの世界でもボッチしている自覚は当然ある。そのことに対して恥ずかしいだとかは多少はあるのだが、もう慣れた…と思う。今の俺という人格を形成したのは間違いなく現在に至る俺の人生の積み重ねだと確信してはいるが詳しいことは…あまり思い出したくない。

「今日は…そうだ。流石にサボるわけにはいかないよな…」

いろいろ物思いにふけっていたら覚醒し始めた頭は今日の用事を思い出し、俺はまだダルさの抜けきらない体を起こし始めた。今日行われるのはこのゲームが始まって以

来初めての攻略会議。つまりは≪第1層フロアボス攻略会議≫だ。

▽

攻略会議が開かれるのは迷宮区最寄りにある≪トールバーナ≫の街だ。街の中央広場午後4時に開かれるその会議とやらにはおそらくこの世界を前線で生き抜いてきたプレイヤーが集まるはずだ。俺はこの攻略会議に出る意味を2つほど見出している。一つは単純にボス攻略に出るため。この2か月間、俺はレベリングだけは欠かさず行っていた。逆説的に言えば鍛錬を怠っていなかった、と言えるのだが俺の場合は目的が違う「この世界で生き抜くため」なんてことは一切考えてなった。「生きたい」とする感情すら俺は希薄で、正直生きていることも……とにかく死ぬという感情が薄いと把握している。

前にリアルで中学の友達とも言えそうにない（ただのデリカシーのない中坊）奴に言われたことがある。「お前って生きてる感じしないよな」と。責任感の強い学級委員は問題をクラス内で起こしたくないのか「何言ってるの！」とそいつを叱りつけたことがあったが、あの男子生徒の言っていることは間違いなんかではない。

もし、俺と誰か見知らぬ社会最底辺の人間が悪魔に囚われ、「どちらかが生贄となるし

か救う術はない」と語りかけてきたのであれば、生贄役を押し付けられたのであれば俺は何の抵抗もせずに生贄になるだろう。それぐらいに俺は生きる意味を見失っている。極論、今は誰かに「死ね」と言われてないから（あとじいちゃんが悲しむだろうなぁ）生きているだけで、レベリングも同様「しておけ」と言われたから、「まあやるか」ぐらいでダラダラ生きながらえている。

　ＨＰがレッドゾーンに初めて入ったときに誰かに救われたことがある。その時初めてこの世界に来て話しかけられたのだが「死ぬのが怖くないのか？」と。俺はその時、反射的に

「じゃあ、死ぬのってそんなに怖いことなのかな」と返したことがあったが（相手には気味悪がられた）、俺からすればあの日から続く地獄が終わるのだと考えれば死ぬことなど…

「まあ、それでもダラダラ生きてるけどね…」

　意識は今の現実…ＳＡＯへ…そこで俺は攻略会議に出る２つ目の理由を探し始めた。ちなみに時刻は会議の始まる３０分前の午後３時半。中央広場にいればもしかしたら会えるかと思ったのだが……見つけた。

「よう、まだ生きてたな」

　片手をあげて挨拶するその相手は

「ヨウ、1か月ぶりだナ～アッキー」
「アッキーて…」
　相手はβ時代に数十回、デスゲーム化してから数回いろんな情報を融通（有料）してもらった相手ひいては情報屋≪鼠のアルゴ≫だ。そう、実のところ俺はβテスター出身でこのＳＡＯの前半層のことはそこそこ知っている。彼女のことはβ出身だと互いに確認したわけではないが確信があった。これは暗黙とはなっているがＳＡＯ内でβ出身と初心者の間には確実に隔絶があり、また埋めがたい溝があることは明らかなのだ。だから俺は自分がβ出身であることをばらすのはこれから先もないだろう。
「まあ、生きてるなら良かった…俺は普通にボス攻略に出るからこれが最後のあいさつになるかと思ってね」
「生きてるかどうかはフレ…ああ、そういや登録してなかったナ。ほレ、一応登録しておけよナ～。あと、縁起でもないこと言うなナヨ。どうせ、ろくに眠りもせずに経験値稼いでんだロ？」
「ん、どうだろうね。俺みたいに生きようとする意識が低い人間はコロッと逝くんじゃないカ？」
　ちょっとアルゴのマネをしてみる。
「似てねーヨ！まったく…まあそれくらいのことが出来るくらいにはまだ余裕がありそ

うだナ。ほれ、何か欲しい情報はないカ?久々の再会祝いに安くしておくヨ」
「ん～そうだな～…じゃあ今日の攻略会議に女の子は何人参加しますか?」
　これなら流石の彼女も分からないだろ。おそらく数瞬後には「そんなの分かるわけないだロ!」と返ってくる彼女の言葉を笑おうかと思っていたのだが…
「なんダ、そんなことか?おそらく二人だナ。ＳＡＯ内で前線に出られそうな女性プレイヤーは現時点で2人。しかもどちらも勝気で美少女であるときタ」
「これは狙わない手はないナ」と余計な情報まで喋ってくるのでたったそれだけの情報に５００コルも払わされた。そこでアルゴとは離れそろそろ攻略会議が始まる。中央広場にはそこそこの大人数が、その中でその美少女とやらを一目見てみようかとキョロキョロしてたのは内緒の話だ。

▽

「はーい!それじゃ、５分遅れだけどそろそろ始めさせてもらいます!」
　そんな掛け声から始まった攻略会議。少々登場の仕方に演出じみたものを感じずにはいられなかったが今はそのことを頭の淵に追いやる。
「今日は俺の呼びかけに応じてくれてありがとう!知っている人もいると思うけど、俺

は≪ディアベル≫、職業は気持ち的に≪ナイト≫やってます！」

容姿からして初日からゲームを始めた廃人ゲーマーには見えないような爽やかイケメンぶり、だが中央広場まで助走なしで飛んだ筋力・敏捷力には目を見張るものがある。ついでに言えば彼が青色に染めている髪の色はおそらくモンスターからのレアドロップであることは明らかだった。

「…今日俺たちのパーティーがあの塔の最上階に続く階段を発見した。とうとう、たどり着くってことだ。第一層の…ボス部屋に！」

この掛け声で集まったトッププレイヤーたちの間に少なからずどよめきが走る。そしてディアベルはこう続けた。

「…俺たち、ここまで到達するのに一か月もかかったけど俺たちは示さなきゃいけないと思う！ボスを倒して、第二層に到達してこのゲームそのものがいつかは必ずクリアできるものなんだってことをはじまりの街で待っている人たちに伝えなきゃならない。それがここにいる俺たちトッププレイヤーの義務なんだ！そうだろ、みんな！」

びっくりするほど演説慣れしたその青髪のプレイヤーは確かにトッププレイヤーを自主的に収集し、それを率いていこうとする気概を兼ね備えているように見える（〝兼ね備えている〟と断言できないのはたんに俺がひねくれているからだ）

（まあ、こういうプレイヤーがこのＳＡＯにいてくれただけ助かったかな…俺ならいく

らなんでも目立つことは避けたいし、めんどいし、人前で演説とかできないし）

やりたくない動悸が半分以上コミュ障であることが起因していることが何とも言えない感情を引き起こしたが、俺は自信をもって「これまでの〝俺〟という歴史書に自己紹介で噛まなかったことはなかった」と言えるので今更強がる必要なんかない。逆にユーモアに自分の戦力以上の自己紹介をしようとしたことで滑ったことなんてそれこそ星の数以上だ（そんなに自己紹介したっけ？）

不意にいい感じにまとまりかけた攻略会議に冷や水が投入される出来事が起きた。

「ちょお、待ってんか！」

ディアベルとは似ても似つかない粗暴な風貌、登場時のジャンプ、そしてなぜかでかい態度。俺はこの男が何を語りだすのかはなんとなく察しがついた。

「わいは≪キバオウ≫ってもんや」

なんとも容姿に負けないネーミングに一瞬笑いがこみ上げるが、内心穏やかではないことが表情から見て取れる。要するにキバオウの主張はこうだ初心者をはじまりの街に置いていったβテスターは自分たちに詫びを入れろ、お前らがちゃんと手ほどきしてくれたら２０００人も死ななかったとそういうことだ。

まあ、俺にしてみればそれどころではなかったとしか言えない。若干のアドバンテージがあることには変わりないかもしれないが、この1か月β時代と差異が感じられる箇

所なんて数えていたらキリがない。…考えもしたくないが死んだプレイヤーにはおそらく割合的にβ出身の方が多いのではないだろうか？俺も油断して差異を見切れずに死にかけたことは何度もあったし…

と、キバオウの名乗り出ろコールに俺は応じる気は全くないどころか正直今話題に上げるようことでもないだろと早々に切り捨てた。そんな時

「発言、いいか」

と名乗り出る、大男、巨躯、チョコ、壁いくつもの検索ワードが該当しそうでいて人種からして違いそうな男が噴水近くまで進み出る。

「俺の名前はエギル。つまりキバオウさん、あんたの言いたいことってのは元テスターには謝罪・賠償しろ、という事だな？」

「そ…そうや」

明らかに気圧されているように見えるキバオウ。まあ、あれは俺でもビビるわ。フレイジー・ボアとか素手で倒しそうだもんな～あの人。

「でもなキバオウさんカネやアイテムは確かになかったかもしれないが、情報だったらあったはずだぞ？このガイドブック、あんたも持っているだろう？なにせ、無料配布されていたんだからな」

…なにっ!?俺カネとられたんじゃが？と、この本の配布主：金勘定にうるさいアルゴ

がまさかそんなことしているとは夢にも思わなかった。どうやら会場全体の反応を見るにみんな持っている感じだった。

　そこからエギルはただ無料で置いてあった、しかも街についた時からこの本はどの町にもあったという理由から「この本はテスターのヒトが作ってくれてものであり少なくとも今は感謝すべき」とし、キバオウの主張と真っ向からぶつかり合った。印象からしても謝罪を要求するキバオウに、攻略を前向きにとらえようとするエギル。キバオウはその真っ当な理由に加え、ディアベルの話術による円満な仲裁によって今のところβテスターのことについて今は不問となった。

　ここまで長かったような気がするがここからやっとボス攻略について身の入る話になるのではないかと…最初は僕もそう思ってました…。

「この攻略本のおかげで少なくとも偵察部隊の危険を冒さなくてもいい…。みんな今はこの本に感謝しよう！ここからは実際に攻略するために戦略を練っていきたいと思うんだけど、何はともあれレイドの形は作らないといけない！なので、まずは…」

　おいおい嘘だろ？ここであの悪魔の一言言っちゃう？言っちゃうの？

「仲間や近くにいるヒトとパーティーを組んでくれ！」ドーン

　あーーー言っちゃったよ。俺がこの世で二番目に嫌いな言葉「はーい、二人組作ってー」だ。

簡単に作れるなら生きてきて十数年ボッチしてねぇよ！など思う事を心の中で叫んでいるとどうやら俺は本当にあぶれたようだ。大体５～６人が理想のパーティー構成のようだが、どうやら本当に皆さんの頭の中には俺を仲間に入れるという選択肢はないようだ。俺、まだハイディングスキルは持ってないよ？ここで何かして一気にタゲを取るのもいいが残念ながらパッシブスキルで常に俺に働きかけているコミュ障スキルが行く手を阻む。

（はぁ～これじゃボスの取り巻きＭｏｂ担当か、もしくはどこかのチームが可哀そうがって入れてくれるのを待つしかないかな？）

この悲しい気持ちがなんらかのデバフを引き起こすのでは？と冗談めいたことを考えながら周りを見渡してみるとなんとあぶれてそうなプレイヤーが一人いるではないか！

普段の俺ならあり得ないが…一人残されて先生と準備体操するような羽目には陥りたくはないのでそのプレイヤーに近づく…が、少々ここで問題が発生した。どうやらこの子…女の子だ!!

（ここまであからさまに近づいて何でもありません～とは言いにくい…。でも先生と準備体操する気持ちはごめんだ…）

「なに、あなたもあぶれ組？」

なんと！向こうからしゃべりかけてくれた。
「う…うん、そうなんだ。君も？」
「まあね、この様子を見ればわかる通り…見事にソロだわ。まったく、この世界じゃ女も男も数値次第なのに…失礼なものよね」
「確かに…それは一理あるね」
内心穏やかではないが会話がちゃんと成り立っている。どうも俺も彼女も見た目でパーティーに誘われなかった節がある（俺の身長はそんなに実際そんなに高くない）。まあ、彼女にはもう一つ、女の子だから誘えなかったんじゃないかとも思う。エギルさんとかディアベルなら分からないけど基本ここにいるの生粋のゲーマーだからね～女の子に声をかけられないパッシブスキル持ちは果たして何人いることやら…。
「あ…じゃあ今から申請送るね」
「ＯＫ、ありがと」
「えと、じゃあ簡単に自己紹介するね俺は≪Ａｋｉ≫」
「≪Ｓｉｎｏｎ≫よ、主武装は短剣。よろしくねアキ」
必要最低限のことしか喋ってないがなんとも軽やかに彼女はしゃべる。俺から見て大人びて見えるし、実際年上なのではないかと思うがそこはリアルの話を持ち出すのはタブー。正直ここからどういう会話を紡ぎだせばいいのか頭をフルで回転させていた

のだが、Ａｋｉの脳内エンジンではこの状況自体がエラーを起こしているので検索結果は当然のように出ない（女の子となにを喋ればいいのか分からない）。そんななか隣に座っているシノンは特に気にしたそぶりも見せずにキョロキョロ周りを見渡している。

「ねえ、アキあそこの細剣使いと後ろに剣担いでるあの人たちも二人組なんじゃないかしら？」

「あー確かに周りの人たちに馴染んでるようにも見えないし…あそこの二人組もあぶれたのかな？もし、そうならパーティー組む？」

「そうね、年も近そうだしパーティーメンバーが多いに越したことはない気がするわ」

「うん…じゃあ近くまで行ってみようか」

この数か月で一番しゃべってる自覚をしながら、シノンと近すぎずでも遠からずの会話をする。俺自身おしゃべりではないのでこれくらいのテンポで会話するのはとても心地がいい。

中央広場の左端から右端に移動し黒髪の片手用長剣を担いでる少年に話しかけようとする。シノンとの軽い運動のように繰り広げた会話のおかげで今なら多少の人見知りも無視できる。

「あのさ…君たちも二人組だよね？もし、良かったら一緒にパーティー組まない？」

自然に…自然に…そしてディアベル顔負けの笑顔も添えて…はうまくいったか知ら

ないがちゃんと相手に言葉は伝わった。
「本当か!?実は男が一人しかいなくて肩身が狭かったん…ツダ」
「そうね、こちらとしても願ってもないことだわ」
　へぇ～2人組でも肩身が狭いことってあるんだな～と俺は一つ社会勉強した。ところでダメージは入らないにしろ正拳突き食らってたけど大丈夫かな?うずくまってるけど大丈夫なのかな!?ただこの片手剣使いと細剣使いは今日が初対面ではないことがこのとき感じられた。

一層～距離～

コボルドから振り下ろされるハンマーを後ろに引いて避ける。が、経験値の効率を図るためにＭｏｂを大量に引きつけての戦闘なので囲まれていることを忘れてはいけない。四体ほどに囲まれているが、うまいこと四方に囲まれた。普通の人がこの状況を考えれば絶望的なのだが頭の重要なネジが外れている≪Ａｋｉ≫に限って言えばその状況は好機であった。一対多数を有利に進めたいのならばまずは敵の機動力を削ぐことは必須、であれば最初に狙うべき場所はＭｏｂの足だ。だからアキは身を低く、そして薙ぎ払うように相棒の≪アニールブレード＋５≫を振りかざす。怯んだ敵の隙を見逃さず、単発ソードスキル≪ホリゾンタル≫で二体ほど範囲内に収め、消し去る。残った背後二体にスキル硬直による大きな隙を与えてしまうことになるが…俺のもう一人のパーティメンバーが短剣範囲系ソードスキル≪サイド・バイト≫でＭｏｂたちを四散させてくれた。

つまるところ今、俺は迷宮区にシノンと共に潜り込んでいるわけである。

▽

さかのぼること数時間前…俺たちキリト、アスナ、シノン、そして俺で四人パーティを組むことになったわけなのだが、ディアベルに『ボスの取り巻き、コボルドにつぶし残しが出ないようにE隊のサポートをお願いしたいんだけど…いいかな？』と爽やかに雑用を任されて、決戦を明後日に控え会議は終了モードに突入した。

俺は別段ボスと直接手合わせしたかったわけではなかったのでノータッチ、空気としてその話題には踏み込まず（はやく、終われ～）と、意識を違うところに飛ばしていた。しかし、アスナは言葉にしなかったが（態度には出てたが）明らかに不服そうで、それを察したキリトはアスナが何か言いだす前に制止した。

『ああ、重要な役割だな。任せておいてくれ』という言葉を添えてこの場を切り抜けようと模索した。

ディアベルは鈍感なのではないか、天然なのではないかとこの時は本気で疑ったが、ボスを直接叩けないことに不満を抱いているオーラを出しているのはどうも二人いる。アスナと…

「雑魚討伐隊のサポートって…もうサブのサブじゃない。何が重要な役割よ」

あきれたようにシノンが言う。

「いやいやフィールド内で二手に分かれるとして2人組…そこからのスイッチとPOT

ローテするのにも、二人じゃきついものがあるから」

どうどう、シノンさんはお怒りのようだ。ボスなんて言う危険・リスクの塊と手合わせしないで済むかもしれないことに安堵こそあっても、憤りを感じるなんて…。（「スイッチ？ＰＯＴローテ？」とアスナさんから疑問形のＷｏｒｄがチラホラ聞こえるが）俺は少しだけシノンという人間がどういう人間なのか気になった。

「シノンはボスと戦いたかったんだ？」

「まあ、そうね…強くなるにはボスと戦った方がいいってガイドブックにも書いてあるし、熟練度？かしら、それも高レベルのモンスター相手の方が上がりやすいって…」

「でも、そんなことしなくてもシノンのレベルじゃあまり…この層のモンスター程度じゃあまり成長は見込めないよ？」

そうなのだ、しっかりレベルを上げているシノンのレベルはこの層では安全マージンもいいところ。やはり一か月ちょっとという長い時間この層にプレイヤーたちが留まり続けたことで比較的β時代とは、フロアを攻略する慎重さ（＋レベルも）が違う。

「ええ、そうね…たしかに数字を見れば、そんなことは初心者の私にも分かるわ…。でも、私は目に見える強さじゃなくてもっと…いえ、今喋るようなことではなかったわ」

（なーんか一枚岩では収まらないような物言いだな…）

シノンの言葉の真意とは何なのか追求したい気持ちはあったが、話の途中で引き上げ

るような言い方をしたという事はこれ以上喋るつもりはないという意思表示だろう。俺もボス戦前にパーティメンバーと険悪になるのだけは勘弁なのでこの話は終わらせる。

「とにかく私はボスと戦わずに勝利するなんて考えてないから。ちょっとディアベルに抗議してくる」

「まだどんな敵かもわからないのに、勝利することを前提にしたかのような言い方…こりゃ確かにアルゴの言ったような性格に間違いないね」

シノンがディアベルのもと歩き出して、彼女の耳に聞こえないような音量で独り言をする。ボス戦大変そうだなと溜め息が同時に出るが、彼女の戦いに挑む姿勢は俺がβ時代初めてこの世界に来た時の情熱を少し呼び覚ましたかのような感覚がして不思議と嫌な気持ちではなかった。ほんの数か月しかたっていないが、あの時この世界に潜っていられた間だけはこのＳＡＯの世界こそが俺の〝居場所〟だったのだ。

そのような感傷に浸っていると我がパーティメンバーであるキリトとアスナが、何やら明日の予定やらスイッチはどうのこうのとしゃべっている。仲のいいことだ。

「おい、アキ！（仲のいいことだ）みたいに思っているような顔でこっちみている暇があったら、この細剣使いさんを説得するの手伝ってくれよ！」

「おわっ、なんで俺の考えてること分かったの?もしかして、システム外スキルか?お前チーターかよ〜」

「いや、そんな顔してたから!ってかそれは今、マジでいいから!この細剣使いさん〝スイッチ〟も〝ＰＯＴローテ〟も知らないのに明後日のボス戦に挑もうとしてんだって!」

「マジでか。君パーティ組んだことないの?」

「ないわ」

それが?みたいに、冷や水を与えるかのような目線でこちらをジト目で睨み利かせてきた細剣使い(フェンサー)さんことアスナ。ちなみにこの時初めて彼女としゃべったのだが会話時間わずか０．５秒、会話のキャッチボールは剛速球で終わった。

「それで教えてあげようとしてんだけど、全然聞く気がないんだよ」

「聞く気がないんじゃないわ!説明するのになんで酒場に一緒にいるところを晒したり、一緒の宿に行かないといけないのよ!」

「ちがうって!練習用の簡単な朝限定のクエストがあるから、今日のうちに一通りレクチャーしたいだけなんだって!」

「だいたい、人目につかないところならフィールドにたっくさんあるでしょう!」

「君が初心者じゃなかったらＭｏｂ倒しながらでも片手間に教えられるけど、わんさか

Ｍｏｂが出てくるフィールド内でちゃんとした説明ができるか！」
「だからって鍵付きの宿に連れ込んで何するつもりよ！」
「何もしないよ!!」
「君たち仲よいね」
「「よくない!!」」
　何だか空気になりかけていたよ。いやなっていたネ。まあ、正直そこまで初心者であるならばキリトの言う通りレクチャーを受けるべきなんだが…まだ一層の時点でフィールド内で気を散らしながらの戦闘は危険だし…かといってアスナの気持ちをないがしろにするのも…ここは…仕方がないなぁ…
「かくやす、フロ付き宿屋ぁ～～（ダミ声）」タラリタッタッタラ～
「格安、風呂付き宿屋？」アスナ首カシゲ
「…ああ！あそこかミルク飲み放題の。でもあそこだってフツーの宿屋じゃないｋ…」
がしっ
「そこに、しましょう！」
「い、いぇすあいどぅー……お、おいアキえもん、これはどういう状況なんだ？」
「いや～こんなに簡単にうまくいくとは…ま、説明を受けると言うついでなら、その宿に泊まるということに大義名分もどうにか立つんじゃないかと思ってね」

「そうか、女の子だもんな…ミルクたくさん飲みたいんだろうな…」キリッ
「ちげぇーよ！」という言葉は面白いので言わないことにした。まあ、女の子だし風呂とか入りたんじゃないかなと、思ったので密かに目を付けていた宿屋を紹介したにすぎない。
「じゃあ俺は今からあの細剣使いさんをその宿屋に送りがてら明後日のボス戦の準備に取り掛かるけどアキはどうするんだ？」
「俺は…まだシノンが帰ってこないからここで待ってるよ」
「そうか、じゃひとまず解散という事で。また明日な」
「う～す」
　互いに右手を挙げて別れのあいさつをする。なんだか、久しぶりにこんなに喋ったが案外疲れなかったように感じる。まあ、ＳＮＳ上でリアルとは性格が変わる人がいるように、ここもある意味でリアルではないのだからちょっと性格に変化が起きているのかもと考察してみる。キリトたちの背中が見えなくなったぐらいで、シノンがやっとディアベルのもとから帰ってきた。
「何よあいつ！こっちが女だからって話半分に受け流してッ」
「戦果はどうだった？」
「別に特に何も？フルでボスを叩きたいなら、今回のボス戦で取り巻き相手の立ち回り

を見て判断させてほしいって、遠回しに拒否られたわ」

　足を組んで段差に腰を置くシノン。この世界で生きるには自分のパラメーター、数値がすべてであるとみんな知っているはずなのだが、やはりというか…みんなの共通意識の奥深く、自分でも認知できないようなところで「シノンのような可憐な女の子に過酷な戦いはさせられない」という見栄のようなプライドがあるのだろう。そういう意味ではディアベルの言う「今回は我慢」というのも仕方ないかもしれないのだが…。

「最後には『お姫様には騎士の護衛が必要だ。彼にちゃんと守ってもらわないとね』とか！うすら寒いにもほどがあるわよ！」

「はははは（ディアベル絶許）」

「アキが嫌なわけじゃ全然ないんだけど…こうも明らかな門前払いを受けたとなると愚痴の一つや二つ…」

「まあまあ、ボス戦はこの一層だけじゃないんだし、シノンが本当に攻略に不可欠な存在だと認識されれば向こうからお願いしに来るさ。今はとにかく技を磨こう」

「…そうね、それもそうだわ。……あんた、なだめるの上手ね」

　ふふっと笑いかけてくれたシノンの顔はエンカウント数時間に及んで初めて見せてくれた顔だった。正直ドキッとしたのは秘密だ。

「そういえば、キリトたちは？」

「今、アスナにパーティでの戦い方をレクチャーしてるとこ。あいつらのところに行く？一応、ボス戦までとはいえ協力するわけだし」
「いいわ、私これから迷宮区に潜るつもりだし」
「まじで？今から？」
「そうよ。短剣の熟練度をもう少し上げておきたいの。それに技も磨かないといけないしね」
「くうっ」
先ほど俺の言った言葉を反芻されてしまった。俺の方が確かにこの世界では先輩かもしれないが、先ほどのセリフはちょっと気取ってしまった感が否めない。当のシノンはクスクス笑っているがめちゃくちゃ恥ずかしくなってきた。
「ふふっ、いいのよ多分アキはいろんなＶＲゲームを体験してきたんでしょう？あなたは間違いなく私の先輩なんだから恥じることはないわ……そうだ、アキも一緒に行かない？連携の確認をすることも含めて、ね？」
「へ？」

▽

そうして、今≪トールバーナ≫から迷宮区へ場所を移して連携の確認、ひいてはシノンの熟練度上げを手伝っているのだった。
「ふう…短剣はほんとダメージ量が少ないわね。コボルド相手でもソードスキルなしじゃ、倒すのにも一苦労って感じ」
「まあ短剣は手数が多いこと、素早さ、あと回避。それが長所だし、正直ダメージ量はこの先武器のレアリティで補うことができる…はず」
危ない、あまり断言したことを言ってしまうとβ出身だとバレてしまう。
「短剣は身軽さ命の、ガリガリ敵ＨＰを削っていくっていう考えをした方が気が楽かもね」
「はあ、やっぱりそこらへんの知識はちゃんとした人に聞いておくんだったわ」
こんな感じの会話をちょくちょく挟みながら迷宮区タワー下層をうろつく。彼女とコンビを組んで行う戦闘は、まさにβの時組んだ廃人ゲーマーと遜色ない。なんだかイメージしにくい言い方だがとにかくほしい時に彼女の攻撃が来るので、俺がメインのサブダメージに彼女を置くことで戦闘の効率が上がりまくりだ。
「シノンはどうして短剣にしたの?なんだかこう、大ダメージとか与えてた方が性に合ってる気がするけど」
「その考えは間違いじゃないわ、私も大ダメージ狙いに大剣を手にしたこととかもあっ

たけど…ま、優先順位ってやつね。私、狙った所に攻撃が通らないことが大ダメージを与えられないことよりも耐えられないみたいなの。短剣だと狙いが定まりやすいじゃない？そういう単純な理由」

「なるほどね、つまりは接近戦はＣＱＣってやつだね！」

「しーきゅーしー？…って何かしら、それ？」

「…なんでもないです」

「そう」といって俺の渾身のギャグ？をスルーしていくスタイルのシノンさん。俺は先ほどから機会をうかがってはユーモアかつバラエティーに富んだギャグを挟むが、ことごとく撃沈、俺のメンタルポイントは０に近い。それにしても「狙いを定める」か…何だか言いえて妙だがシノンが言うと何だかしっくりくる。

「じゃあ、シノンはクリティカルボーナスを狙いに行くのがこれからの戦闘スタイルになるかもな～」

「クリティカルボーナス？つまり相手の急所を狙い撃ちするってところかしら？」

「そう、まさにそれだ！器用さを上げていくことで狙いが定まる、あとそれにスキル硬直時間の短縮にもなるしまさに一石二鳥↗」

「ふふっ、なに？どっかのテレビショッピングみたいよ、アキ」

「実のところ、俺は片手剣なんだけど器用さ中心に組み立ててるんだ。よく強さと耐久

値に目が行きがちなんだけど…確かにそれはシステムでしか上げられないし、器用さは生来生まれ持った感覚次第である程度のアシストが出来るものでもある。それでも、俺が持つ感覚とシステムによる向上された器用さが相乗効果的に敵のダメージとして出る確率は、最早レイピアとの違いはないんじゃないかって思ってるんだ」

「なるほどね～、正直武器の強化で何に振ろうか迷ってたんだけどその話聞いたら吹っ切れたわ」

「そいつは良かった。それにしてもシノンがいきなり狙い定めるだとか狙い撃つとか言うから一瞬ここが違うゲームなんじゃないかって勘違いしちゃったよ～」

この時、俺は何でもないこの会話をとてつもなく後悔した。

「たとえばＦＰＳ系の洋ゲーとか」

会話にあわせるように手で銃の形を作ってシノンに向けようと…したところで彼女の異変に気が付く。

「…っあ……ぅあ」

そこには血相を変え、急に頭を抱えてうずくまったシノンが

「シノン!?おいっ、大丈夫か！頭が痛いのか!?」

「い…やぁ、ごめんなさいごめんなさいごめん…」

急に謝りだしたかと思ったらこと切れたように眠りについた、いや気絶した。ここは

まだ迷宮区で人を運ぶにはまだＳＴＲ値が足りない。こんな時に不幸は重なるもので周りにはコボルドたちがリポップするのであった。

▽

ああ、またこの夢だ。辺りを見渡すとそこはこじんまりとした地方の郵便局。私が人を――した日。私の運命が変わった日。私の地獄が始まった日。

どうやら局員のヒトが私のお母さんを読んでいる。

「そんなことどうでもいいから！ここから離れようよ！お母さん！」

そんな簡単な言葉ですら口から出ていかない。体が動かない。よく見たら体中に血で染まった無数の腕が絡まりついている。私のお母さんのすぐそばまで死神が近づいていく…。ああ、今回も夢の中ですら運命を変えることはできなかったみたい。私はこのまま変われないまま……。

▽

「おかっ……！」

「っ！…おはようございます…」
「？なんて格好で椅子に座っているのよ」
「シノンがいきなり起き上がってくるからでしょっ！もう…」
　シノンがいきなり飛び起きたことによって、びっくりした俺はロッキングチェアに体育座りという少々みっともない格好になってしまっていた。手にしていた本も勢いで投げてしまったし、ホント無様である。ちなみにここはトールバーナの宿屋、風呂付きだ。コボルドの群れはなんとか殲滅し、少々手荒な方法ではあったがシノンの移動も支障なくことが進んだ。
「それよりもシノン大丈夫？いきなり倒れちゃったりしたけど、頭まだ痛かったりしないか？」
「ええ、苦労かけたわ。もう…大丈夫」
「まだ大丈夫そうじゃないね…今日はもう１２時近いし寝ちゃおう。明後日にはフロアボス戦が待っているんだし…今は休息をとって回復を待とう？」
「…そうね、じゃあお言葉に甘えさせてもらうわ、少し横になってる…。眠りにつくまでお喋りに付き合ってちょうだい…」
「うん、いいよ…。と、その前にごめんなシノン。まだよく分かってないんだが、おそらく会話の中で俺が間違いなく君を傷つけてしまったんじゃないかと思ってる…。本当

にごめんなさい」
「なに？別にそんなことで怒ってなんかないわ。これは自分の弱さが招いたことなんだから、アキが謝る必要性なんてどこにもないわよ」
　力のない笑みで笑いかけてくれたが、俺としてはそうはいかない。原因は何だったのか、なにがシノンの身に起きたのか、それが分からないと俺はまた過ちを犯してしまうのではないかと不安になる。と、そんなことを考えていると顔に出ていたのか
「ほんとに大丈夫だからそんなに気にしないで」
「でも、また不用心に傷つけちゃうかもしれないし…せめて何か…」
「そうね……深く追求しないでくれるなら、ちょっとだけ教えてもいいけど…」
「うん…約束する。だから、教えて欲しい」
「ふぅ、まったく…さっき出会ったばかりのヒトに喋るようなことじゃないんだけど……」
　そこで1，2分ほどの間をおいてシノンが口を開く。
「銃よ……私の前では銃の話を一切しないでほしいの…あと手も…あまり…その」
「ＯＫ分かった。絶対にしない。神に誓って、シノンにそういう話題を振ることをしないことをここに誓います」
「別に神様に誓い建てするようなことでもない気が…うん。でも、理由は聞かないでく

れるのね…ありがとう」
「いや、こちらこそ。そんな大事なことを俺なんかに……今度なんでもお礼でもお詫びでもするから！聞きたいこともあったら、何でも聞いてくれ！」
「ふふっ、ありがとう。期待して待っとくわ」
その時ベッドから顔をのぞかせ、見せた笑顔はとても暖かくておそらくＳＡＯ全プレイヤーが見惚れるような輝きで…あのようなミスを犯してしまったのは、若さゆえだろう。
「あ、あ～そうだ！第二層のウルバスっていう主街区に≪トレンブル・ショートケーキ≫っていう超絶品のケーキがあって、第一層が攻略出来たらそれをシノンにおご…あっ」
「…ん？」
…やっべぇえええええ!!俺は今までβ出身だという事を隠し通してきたのにこんな青臭い（実際ガキ）ことでバレてしまうなんて！……いや？まだ行けんじゃね？シノンが気づいてないってワンチャンあんじゃね？
ちらりとシノンの方を見やる。そこには
「ふふふっ、ふふっ、あははは！」
気づかないわけないデスヨネ～。ああ、これからみんなの前でつるし上げられて、身

ぐるみはがされ、路頭に迷う未来が見える…。
「あははは!はあ〜あんた本当にあり得ないわ!ただでさえ初心者とβテスターの間には溝があるのにこんな簡単にばらしちゃうなんて!命が何個あっても足りないわよ」
仰る通りです。はやく…わたしを裁いて、ほしいッ（ここ伝わる人いるかな?）
「まあまあそんな悲しそうな顔しないで私はキバオウみたいに敵対したいわけじゃないし、むしろ感謝してる。だからあんたをあいつの前に差し出すことなんて永久にないから安心なさい」
「ほんとですか!シノン様!」
「様とかいらないから!やめてよね?」
シノン神っ!とか言うと気が変わって血祭りにあげられるかもしれないので言わないが、ここは本当に彼女に感謝すべきところだと思う。本当にお騒がせボーイな俺だがリアルなラックが作用したのかお咎めなしと下されたので改めてシノンに宣言しておく。
「シノン、改めて言うのも躊躇(ためら)われるけど俺はβ出身だ。威張って言う事ではないけれどこの世界に関する知識ならそれなりのことは言えると思っている。そんな俺を君は匿ってくれると言ってくれたことは本当に感謝の言葉しか出ない。だからここに誓う。今日はシノンに借りを作ってばっかだけど本当に困ったときは俺を呼んでくれ君のた

めに出来得ることならなんでも手伝うし、なんでも教えてあげる。だから……だから、これからもよろしくシノン！」

「ほんとに改まって言う事ではないわね。ふふ、でもありがとアキ。これからもよろしくね」

知り合ったのは今日の夕方だったがとても濃い一日だった。俺に秘密の一部を預けてくれたこと、俺の秘密を預けたこと。起きたことが目まぐるしく記憶の中をたゆたう。本当に大切な時間だった。俺はこの心に生まれた感覚を覚えている。暫く居場所をなくしていた俺の現実では大分昔に失くしたもので、失くした時間が長すぎて麻痺しかけていた心が再び動き出した感覚。

「もうそろ12時回るな。俺隣の部屋で寝てるから何か用があったら…」

「ええ、そうね。おやすみアキ」

「おやすみ、シノン」

この言葉を発したのはいつぶりだろうか、たいした事でも、何でもないような事だったが、俺にはなんだかとても大切なもののように感じられた。願わくばこの時間が続きますように…。

一層～攻略～

ββ時代、初めてのボス攻略にパーティーというものを作った。その中にはβ当初から仲良くして貰っていたプレイヤーがいたのを覚えている。彼は今何をしているのだろうかと考えたことがあった。一応、はじまりの街の石碑に気紛れの確認しに行ったことがあるのだが、彼の名前はなかった。つまり、彼はこのＳＡＯに捕らわれずに運よく現実に意識を置いてるのだと、そう思っていた。でもよく考えれば違う可能性も残っている。現実と混同しがちだが、この世界で呼ばれるプレイヤーネーム、またはアバターネームは現実の名前ではない（そうじゃない人もいるけど）。ゆえに明らかにゲーム大好き星人だった彼がこのＳＡＯにログインしていないのではなく名前を変えてこの世界にきっと生きているんだろうと結論付けた…のだが、正直なところ気にするわけでもなく、本当に暇だったから探偵の真似事みたいなことしたその時の俺。では、今どうして思い出すことになったのかというと…少しだけ心に引っ掛かった覚えがあるのは攻略会議の日。そういえば、彼の口癖は――

▽

「そう、で今のがスイッチを使った連携戦闘の流れだ」
「何か言った？」
「イエ、ナンデモ」
（あいつら昨日の夜に何かあったのかな？）
　朝一から見事な会話の連携を見せてくれたのは我がパーティーメンバーのキリトとアスナだ。それにしてもアスナから送られる目線は実に冷えている。それをしり目に俺とシノンも連携を再確認した。彼女が先日俺に相談してくれた「自分の目指すべき戦闘スタイル」に沿うように、シノンはスイッチ後の正確無比な短剣裁きを今日も見せてくれる。
「ナイスクリティカルだね、シノン」
「ええ、ありがとう」
　会話終了。うーん、実にこちらの関係も冷めているでやんす。昨日あんなことやこんなこと、とにかく色んな事があって暫定的パーティーメンバーとして秘密を共有しあった仲という、この上ない進展を見せたのだが、どうにもこの一日でリセットされてしまったかのような冷え込みだ。というか、気まずい。
　連携はこの上なく仕上がっているのだが、この気まずさから会話のキャッチボールが

困難となると不便…というか嫌なのでこの後はまた親睦会でも開いて…
「だから、昨日のお風呂の件は事故だから!」
「嘘っ!じゃあなんでアルゴさんが開ける前に止めなかったのよ!そこからして、あなたの下心が丸見えだわ!」
「そんな下心ねぇえ!」
「うるさいよ!そこのつがいども!!」
「つがいじゃないっ!」
ほらね、息ぴったりジャン。今日は俺とシノンがこんな調子なのでこの二人をいじる回数が必然的に増えるのであった。

▽

何やら、先ほどドロップしたレイピアの強化に行くことにしたらしいアスナとキリト。今日のところのレクチャーは終了なのでシノンも短剣の強化に乗り出すことにした。その行き道で
「そういえば、片手剣使いの二人は同じ剣を使ってるけど、実はその剣って何かのクエストの報酬だったりするのかしら?」

とシノンから質問が

「正解。≪森の秘薬≫っていう我ながら超めんどかったクエストがあってだな～。ま、ちゃんと最後まで強化できれば3層くらいまで持つ逸品だよ」

うん、ちゃんと答えられた。えらい、俺。シノンの質問に答えだけで自らを褒めるというボッチここに極めしものがひとり。その先にはそのボッチ（＝アキ）をあり得ないと凝視する者ひとり。ボッチこの時、自らの失言に思ひ及ぶ。あ、βテスターであると隠すことを忘れていたなりと。

「タイム」

「タイムって！お前、まさか…！」

しかし、キリトの声はそこで何かに気づいたかのように途切れる。おそらく俺が元テスターであることをアスナとシノンにバレないようにしようとしたからだ、と思う。この少年が今のアクションを起こしたことで優しい心の持ち主であることが分かったが、どうやらこの状況を変えられたかというとそういうわけでもない。とうに先を歩いていたアスナからじろっとこちらを睨みつけている様子がうかがえる。

「なに、あなた元テスター出身だったの？」

その言葉にはらんでいる感情が怒りなのか、悲しみなのか、違う感情なのかは分からないが嘘を許容されそうな雰囲気ではない。そもそも今隣にいる暫定的相棒はその事

実を知ってなお、構わないと言ってくれたのだ。ならば俺のとるべきことはちゃんと誠意をもって喋ることだ。

「そうだよ、俺は元βテスター。多くのプレイヤーから見れば初心者のヒト達を置いていった卑怯者かもしれない。それは否定できないし、もし君がそんなプレイヤーとは一緒のパーティーでやっていけないと言うのなら俺は速やかにこのパーティーから抜けるよ」

少々早口ではあったが思いの内を吐き出した。少なからず昨日のキバオウによる演説はβテスターに対する溝をみんなに築かせてしまうには十分すぎるほどのものだった。今まで特に気にしていなかった者も、きっと「そうなのではないか」と懸念しただろう。

「…ひとつだけ聞かせて。なぜあなたは直ぐに隣町までいったの?その理由は?」

効率のいい狩場がある。片手剣のクエストがある。それらを集約させた俺の動機としては

「すまない、俺には人の命を背負えるだけの背中がないんだ。俺にとっては自分の命すら…」

失くなってもどうでもいいのに…。そこからの声は出せなかった。この答えはアスナにとってどう感じただろうか、やはりこれは逃げなのだろうか。卑怯なのだろうか。

「そう、ならいい。自分の命は誰かに預けるためにあるわけではないんだし、自分の身は自分で守る、なんて当たり前のことだわ。あなたは当然のことをしたまで、謝ることなんて一つもありはしないわ」

「はやく鍛冶屋にいきましょう」とアスナは踵をかえす。そのあとを「お、おい。ちょっと待てよ」とキリトが追いかけ、俺は暫くその場で動けないまま。

どうやら、アスナからもお咎めはないようだ。俺は棒になった足で立ち尽くしながら、困惑していた。俺が生きていた世界とはこんなにも優しいものだったか？いつも俺の外から聞こえるのは自分に対する恐れ、罵詈雑言、そして虚無。俺に居場所なんてないことは自他ともに認めていたはずだった。

当然、今のような告白をすれば返ってくるはずの言葉はいつだって罵声だったが…これはゲームの中だとは言え本当に現実なのだろうか？何者かが見せている温かい嘘であるのならば誰か早く、冷たい現実に返してほしい。こんなすぐにでも消えてしまうような夢を見せられるのなら、いっそのこと見せないで欲しいと心が叫んでいるが、不意に誰かの手が俺の手を握ってきた。温かいその手の主はずっと隣にいてくれたシノン。

……どうかこの手と温かさだけは嘘でありませんように、と祈らざるを得なかった。

▽

フロアボス攻略前日の夜。結局は武器強化を終えた後、各々別れて準備することになり壮行会とかは開かれることなく一日を終えようとしていた。のだが、一通のメールが…アルゴからだ。

アルゴに指定されたとおりにフィールドの中を探索していると、見つけた。見つけたのは明日のボス戦で俺の相棒として立ってくれるはずの少女、シノンだ。午後11時を過ぎてなおモンスターと戦っている。遠目から見るに危険な戦い方をしているわけではなく、肩慣らしと言った方がしっくりくる様子だ。

「本当は明日のボス戦までゆっくり休んでほしいんだけどなぁ…」

彼女の戦闘が大事にいたることはなさそうなので様子見は終了。半分ストーカーみたいなことをしてしまっていたので、そそくさと踵を返して宿に帰ろうと振り返ると…

「あら、お喋りはしていかないの?そこのソードマンさん」

「どわあ!」

いきなり後ろ首を引っ張られながらそんなことを言われたもんだから変な声が漏れてしまった。もちろん相手はシノンさん

「い、一体いつから気づいていたんだ?」

「そうね強いて言うなら、あなたが私を観察し始めたときから？かしら」
「最初からじゃないですか、やだー」
「そういうことよ」
　軽いウィンクをして言ってくる。今は夜更けであり、隠蔽スキルを持つ俺に気が付いたという事は…
「もしかしてシノン…。索敵スキル上げてるの？そうじゃないとこの景色じゃ普通見つからないって…」
「索敵？いいえ、私は何のスキルも使っていないわ」
「え、じゃあどうやって気づいたん…ああ、そうか」
　さっきからニコニコとこちらの話を聞いて上機嫌なシノンさん。どうやら俺は嵌められたようだ。今日、今ここに誘導された原因を作り出した元凶と言えばあいつしかいない。
「いつからアルゴと知り合いになったの？」
「ご明察。ま、知り合いになったのはほんとに偶然だけどね。私がフィールドの雑魚に苦戦してた時にあの例のガイドブックを手渡しされたのが出会いだったかしら？」
　てことは結構付き合い長いじゃあないですか、やだー。近々にでも両者を紹介しようと思っていたのだが、どうやら必要なかったらしい。その際二人とも初対面だから、軽

い冗談でも言ってうまい橋渡しが出来ればな～とちょっとした計画を考えていたのは内緒である。

「で、アルゴを使ってまで俺を呼び出したその心は？」

「使い方違うわよ、それ…。ん、今日はそっけない態度して今更ながら悪かったな～と思ったから、謝ろうかと思って」

「……え、それだけ？もっとこう大事な話でもあるのかな～と思ったんだけど…。それだけ？」

「そうよ。これを言うためだけに呼び出したんだけど…。迷惑だったかしら？」

上目づかいでそんなこと言ってくるもんだから対応に困る。正直、夜で美少女と二人きりの状況とか現実では地球が崩壊しても俺には無縁の現象だと思っていたので脳内シュミレーターが処理に追いつかない。なので俺は、ほんっとうにつまらないことしか言えないのだ。

「だったらインスタント・メッセージで言えば…ああでもこれじゃ短すぎて伝えられないか…。じゃあフレンド・メッセージで…そうかフレンド登録して…ないか」

ブツブツ言ってようやく彼女が俺を誘い出したもう一つの理由が分かった。そう、まだシノンとはフレンド登録していないのだ。俺がそれに思い至ったことがシノンに伝わると、策士がうまくいったときの様な笑みでこちらに向けてきた。彼女はあの微笑み

の裏でこう言っているに違いない。
「場は整えたのだから、最後はあなたが決めなさい」
と、その期待に応えるには少々我が身では荷が重い…とても重い…のだが（なぜなら俺のリアルのスマホには連絡先を保存している女子はいないからだ）、ここまでされてのUターンは、この場でパーティーメンバーを解除されることにもなりかねないので、小学校低学年以来の言葉を発する。
「ふ、フレンド登録しませう…」
「ふふっ、いいわよ。送っといたからちゃんと確認するのよ」
語尾はかっすかすになりながらも言い切った。今日はもう快眠間違いなしの成果を上げた俺はウィンドウを確認してフレンド欄の二番目にシノンの名前を刻みこむ。
「明日はよろしく頼むわよ相棒、頼りにしてるんだからね」
「おーう、任しときぃ！」
最後のは空元気。キバオウみたいな返事を返したがシノンは微笑みながら「じゃあ明日ね」と言い残して宿に帰っていった。俺もかえって寝よう。明日には死んでも仕方ないかなと思っていた心には、ほんの少しだけ「誰かと一緒にいるために生きてみようか」と思う気持ちが芽生えていたのは誰も知らない。

▽

「他のＭＭＯＲＰＧっていうの？やってると移動の時ってこんな感じなのかしら？なんていうか…遠足みたいな」

　不意にアスナからそんな言葉が漏れる。今現在トッププレイヤーたちの集団の真後ろに並び、ボス部屋に向かっている最中だ。その問いにキリトは

「はは…遠足はよかったな」

　と、そこから短く笑いながらアスナの疑問にオチャラけていながらも真面目に答えていく。

「でも確かに、ここまでリアルなゲームだと伝説の勇者様とかの気持ちとか分かってしまいそうよね」

　今度はシノンからも声が漏れる。

「確かにね、でもどんな勇者であれ大きな戦いに挑む前は俺たちの今のこの光景とそう変わらないものだと俺は思うな」

「あら、どうして？」

「だってさ、そいつらにとってみればその戦いそのものが日常であって、その日常の中で雑談とか、今日の午後何しようかとか考えてるわけじゃん？俺たちにだってリアルで過

ごすにも合間を見つけては誰かとしゃべったり、ゲームしたりするもんだろ（俺はボッチだけど）。きっとさ何を日常とするかの違いだけで基本、気持ちの持ちようとか、思いとかそういうモノに違いはないんだよ。勇者様だって思うことあるはずだぜ？この戦いが終わったらＴ○ＵＴＡＹＡにＤＶＤ返さないと～、とか」

「もしそんな勇者がいて救われる世界があったとしたら、世界全体に優しくなれそうな気がするわ、私」

「ふふーん、だろ？」

「なんで、あんたが得意げなのよ…」

　きっと、今の自然な会話をボス戦前にできるようになれば嫌でもこの非日常が日常に変わるだろう。そこまでの過程は遠くあり、何年もかかってしまうことになると思うが絶望を絶望で上書きするのではなく、絶望を希望で上書きできる日が来てほしい、そう願わずにはいられない。少なくとも…

「今日だけは俺の目の前で誰も死にませんように…」

「何か言ったかしら？」

「いや、何でも」

　この目の前にいる少年少女たちだけでも…今日パーティーを解散するまでは誰ひとり欠けないでいられるように祈るばかりだ。

▽

ボス攻略はとうとう目の前の扉を開くことによって始まろうとしていた。そのまえにディアベルからのありがたい言葉があったのだが、昨日の攻略会議の後の合同演習をサボったせいか妙な疎外感を感じつつ締めに入る。

「みんな…俺から言えることはもうたった一つだ！……勝とうぜ！」

そこまで言いきって、ここに集まったプレイヤーたちの士気は最高潮までに高まった。

「「おおおー!!」」

「…私、スポーツとかやったことないからこういう時どうしたらいいのか分からないわ」

「…」

「アキ？」

「…ん？あ、何でもない。ここはとりあえず周りに合わせとけばいいんじゃないか？」

「どうせそんなこと思ってないんでしょ？」

うぐっ、読まれたか。得意げな顔でこちらを見てくるシノンに

「まあ、今回の作戦は撤退することは考えてるのかな、とね。士気が高いまま成功するの

と、指揮官を亡くして一気に崩れるのは実のところ紙一重だからさ」
「そのときは覚悟決めたら？」
その先の言葉をシノンは口に出さなかったが、おそらく「β出身として、あなたが導きなさい」と続くのだという事は分かった。
「はっ、簡単に言ってくれるね」
それが冗談なのか、本気で言ったことなのかは分からないが、それだけは勘弁したいものだ。
「そろそろ、扉が開くわ。じゃあよろしく〝相棒〟」
もし、本当に危険だと判断したときはこの隣にいる少女だけでも…
「ああ、後れを取るなよ」
そして、とうとう戦闘が始まる。敵の名前は≪イルファング・ザ・コボルドロード≫。ま、俺たちは基本その取り巻きしか触れさせてもらえないけどね。

▽

戦闘はガイドブックの攻略法が存分に役立ち、心配が杞憂になるほどのスピードで攻略が進んだ。ボスの体力もイエローゾーンがレッドに突入するのにも時間の問題だ。

そして取り巻き担当の俺たちH隊は
「シノン！スイッチ！狙うところは…」
「鎧じゃない首元…でしょ！」
突進系ソードスキルを正確にセンチネルの首に命中させる。その様はまさに正確無比の女王。これまでに戦闘を何回か共にしたが、今日はその中でも一番集中できている。これだけ正確にソードスキルを発動できるなら、この間みたいに多数同時撃破も夢じゃないと思ったが、担当は取り巻きなので全くＭｏｂが来ない。
「ナーイス」
「ふむ、やっぱり手応えないわね。コボルド王に勝負吹っ掛けようかしら」
「ま、今回ばかりは我慢かな。どうやらこのまま終わっちゃいそうな雰囲気だし。それに、シノンの活躍の場は十分伝わったはずだぜ？」
周りを見渡すとH隊をちらちら見やるプレイヤーが多い。見世物じゃないが、俺たちの連携は確かに良かった。キリトとアスナに限ってはどちらも単独でセンチネルを撃破している。注目はこれでもかと言うほど集めたので、第二層ではシノンの念願ボス攻略に入れるパーティーが出るのではないだろうか。そこまで考えて少し
（その時は隣にいるのは、俺じゃないんだろうな）
と、考えてしまい剣が鈍ったように感じたのは気のせいだろう。

「そろそろ、パターン変更ね」
「おう、だからって行くなよ～」
「わ、分かってるわよ。て、あのプレイヤー…攻略本ちゃんと見てないのかしら?ボスを一定以上の距離で囲まないって書いてあったのに…ちょっと私、伝えてくるわ。ちょっとの間よろしく」
「あいよ」
そういうとシノンはボスの後ろ側に陣を取っているプレイヤーに近づいていった。ボスは取り囲むと強力な範囲攻撃を放ってくるので〝囲まない〟がセオリーなのだ。
ここで、ひときわ大きな声でボスが悲鳴を上げる。ボスの剣が大剣から曲刀(タルワール)に変わる合図だ。シノンは曲刀に変わってからのボスの攻撃パターンは熟知しているはず、ボスもこのままトッププレイヤー隊にまつりあげられて今日の攻略は死亡者0人で終わるだろう。
――?あのボスが後ろにぶら下げている剣は…曲刀ってあんな形していたっけか?
――
その形は明らかに曲刀ではない。どちらかで言うと〝刀〟だ。
「みんな、下がれ!俺が出る!」
俺の心に生まれた疑念をよそにディアベルがボスの前に出る。一気に片を付けるつ

もりだろうが…

「ここは一気に畳みかけるのがセオリーのはず…あいつ何やって…」

「まずい！ディアベル下がれ！モーションに入るな！」

アスナと一緒にセンチネルを片付けていたキリトから咆哮が飛ぶ。そこで俺に電流が走る。キリトが叫ぶ理由、ディアベルが前に出る理由、そしてこのまたたきの間に俺がシノンのもとに走り出す理由がつながる。

「あれは…勘違いなんかじゃない。βと違うんだ！シノンそれ以上は近づいちゃだめだ！」

残念ながら士気が最高潮にまで達しているこの状況では俺の声が届かない。そんなのはとっくに気づいている。だから俺は走っている。あと、五ｍ。

「アキ!?ちょっと危ないわよ！どうかし…」

「シノン避けてくれ!!」

間に合う。俺はその勢いのままにシノンにタックルをかます。

ゴウッ

擬音でも何でもない音を発して俺たちが立っていた箇所をコボルド王のソードスキルが通過する。その事実に戦慄するが、それを直に受けてしまったディアベルがフィールド中央から端まで吹っ飛ぶ。

「うわぁあああ！」
「ディアベルはん！」
「ディアベル！」
　キリトがディアベルのもとへ走っていく。が、数秒のうちにディアベルは綺麗なエフェクトと共に四散した。彼は…そういう事か。俺はここで心にとどめていた違和感の答えに気づくが今気にしている場合ではない。
　ここまで来て初の死者、そして指揮官を失ったという事実がトッププレイヤーたちの間に感染していく。
「うわあああああ」「逃げろおおお」
「もう、ダメかもな…シノンここまでかもしれない。君だけでも逃げて」
　俺はボス戦前に考えていたことをシノンに伝える。なんでか分からないけど彼女だけには死んでほしくないのだ。
　恐怖は瞬く間に伝染していき陣形はバラバラになり、勝機はもうない…かのように思われたのだが、ここで立ち上がるものが二人。キリトと隣に並び立つアスナだ。
「あいつら…」
「アキ…私逃げないわ。ここで逃げてたら私いつまでたっても変われないままだもの」
　今まで沈黙を続けていたシノンから言葉が漏れる。彼女の顔には決意の表れが見て

とれる。あの二人と寸分違わない顔つき、この決意が揺らぐことはないとそう言っている。ならば、俺が取れる行動はもう決まっている。俺はシノンを…

「ふーっ、じゃあ俺も行くよ。俺は君を守る騎士だからね」

「はっ、冗談が言える力がまだ残っているなら十分ね。あと、私は守られる側じゃなくて守る側の人間だわ」

「へいへい。じゃあ行くぞ！シノン！」

立ち上がった俺たちの見据える先にたたずむのはコボルドの王様。レッドゾーンにHPを落としてなお荒ぶる様はまるで嵐のようだ。先行してその嵐と激戦を繰り広げている二人のもとへ駆けつけてから言葉をつなぐ。

「おい！勝手に二人で話進めんてんじゃねえぞ！このリア充どもがっ！」

「悪いな！あとリア充じゃねえ！」スラント　パリィ

「リア充って何よ!?」リニアー

「気にしないで、オタクどもの敵のことよ」

キリトは威勢よくコボルド王のソードスキルを跳ね上げ、そこをアスナが見逃さずに叩く。基本にして最大の攻撃手段。ここでの跳ね上げミスは死に直結する、最大の集中力を発揮して臨む。

「おおお！シノン！スイッチ！」

「はぁあああ！」

相変わらず正確にボスの急所を狙っていく。ここまで女性陣にアタックを任せていたがＨＰはちょっとずつ確実に減ってきている。曲刀よりも軽い分〝刀〟は速い。だが受けるダメージはその分少ない。ボスが曲刀のままならばパリィ時にわずかのダメージが通るのだが刀ならば全力のソードスキルで０のままキャンセルできる。

そんな計算を頭の中で組み立てパーティー内でローテを回していると、先行していたキリト組の方に先に限界が訪れた。それは限界とは言いにくいが、ボスのソードスキル≪幻月≫はランダムに切る方向が変わってくる。

キリトは衝撃のままにアスナを巻き込んで吹っ飛ぶ。

「キリト！」

「シノン、目を離すな！」

隙ができると、まるで意思があるかのようにシノンに襲い掛かるコボルド王。実際攻撃を続けていたシノンにタゲが残っただけであるのだが、今はどうでもいい。シノンに覆いかぶさるようにスキルを打ち込もうとコボルド王が刀を振り下ろした刹那

「お…らぁあああ！」

見た目だけで筋力補正がかかっているかのような容姿を持つのエギル氏のソードスキルがコボルド王の攻撃をパリィしてくれた。

「あんたらが回復するまで俺たちが持ちこたえて見せる！」
「サンキュー、エギルさん！とにかく今はあいつを取り囲まないように注意してくれ」
サムズアップで答えるエギルさん。彼らはもともと壁要因なのでＨＰも防御力も高いが、相殺ではなく、防御なので敵の攻撃を受けきるたびにじわじわＨＰが減っていく。内心ひやひやしているが、彼らの間をＨＰに余裕のあるキリト以外のＨ隊で軽やかに動き回り攻撃をボスに与えていく。
しかし、タンクの一人が転倒寸前で立ち止まった先がボスの後ろだったことは不運以外の何物でもない。
「そこのヒト！早くそこから動くんだ！」
だが、遅い。全方位攻撃≪ツムジグルマ≫がエギル組と俺たち三人を襲う。
「ぐぅ！」
ＨＰはギリ、イエローゾーン。だが追撃が来る！
「危ない！届っ…けぇえええ！」
回復を途中で投げ出してきたキリトが滞空しているコボルド王の腹に向かってソニックリープをかます。空中に向かって放つなんていう離れ業をみて瞬間唖然とするが、落ちてきたコボルド王はなんとＨＰをわずかに残し、〝転倒〟判定を示している。
（間に合うかッ）

「アスナ！最後のリニアー、一緒に頼む！」
「了解！」
「シノン、お前も突っ込め！」
「分かったわ！」
ここで倒せなければ仲良くボスの餌食、ここからはパーティーメンバー全員の全力フルアタックが必要だ。
キィイン！
「セイッ！」
最初にキリトのパリィからアスナの最速リニアーが
「はぁあああ！」
ボスがのけ反りを終えてシノンに切りかかるが
「ハッ！」
キィイン！
俺は全力バーチカルを刀の真横に当ててはじいて見せる。ボスの体力はシノンの攻撃を耐えきり、残り数ドットだ。最後は
「お…ぉおおお！」
キリトのバーチカル・アークが締める。が、ここでまたしても先ほどキリトを薙ぎ

払った幻月が襲い掛かる。キリトは一瞬モーションをあきらめるかのような表情を見せたが

「止まんな、キリトぉおお！そのまま突っ込みやがれ！」

今日一の声を張り上げて叫んで見せた。ここで終わらせるなんてとんでもない！終わらせてなるものか！

俺が先ほど放っていたのはバーチカルではない。垂直切りの二連、今キリトが発動しようとしているバーチカル・アークのそれだ。キリトが来るまでの数瞬、システムアシストが切れるギリギリまで引きつけて二連撃目を発動しようと考えていたのだ。それが、今だ！

キィイン！

幻月のパリィは成功。

「決めてくれ！キリト！」

「おおおおおお！」

キリトのバーチカル・アークは見事にボスの腹を切るようにヒット。そしてボスの巨躯は部屋いっぱいに広がるほどの爆散エフェクトを散らした。

≪ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎ！≫

その表示を見てようやく、戦いが終わったことを理解するのだった。

1．5層～ビーター～エクストラスキル～

ラストアタックボーナス通称ＬＡ。その名が指すように、ボスモンスターのＨＰ残量を消し飛ばす攻撃をしたものが手にすることのできるボーナスのことだ。もちろんその報酬はプレイヤーに大きなアドバンテージをもたらしてくれる。β時代、これを手にしようとしたプレイヤーは数知れず、元βテスターならばデスゲームと化したＳＡＯで何の目的に使うにしろ狙おうとするのは当然のことなのではないだろうか。

不意にさっきまでＬＡの存在を忘れていたプレイヤーＡｋｉがなぜ今になって思い出したのか。それはディアベルの死亡直前のあの不可解な行動だ。なぜボスのＨＰが少なくなった時点で一人前（ひとりまえ）に出たのか…。結論から言わせて貰うと奴は元βテスターであり、俺はβ時代のあいつに会っている。

根拠はＬＡを取りに行かんばかりの行動。そして、俺がβ時代に組んでいたパーティーメンバーに一人、ＬＡを獲得するのに執着するプレイヤーがいた。結局、先行配信期間内で一つもＬＡを取れなかったそいつは（いつも同じ奴がとっていた気がする）よく

「気持ち的ににもうワンテンポ遅くにソードスキルを出せればな」

と呟いたものだ。≪トールバーナ≫で何か感じたのは、ディアベルの喋り方が元パーティーメンバーと被っていたから。β時代の名前は確か悪魔を意味する≪Ｄｅｍｏｎ≫だった気がするが、はじまりの街の石碑にその名はなかった。つまり、ディアベルは心機一転させたのかアバターネームを変え、ＳＡＯに挑んだことになる。

彼は過去を隠したまま、いや抱えたまま仲間まで作り出したのだから、おそらくあの胸中には集団の先頭に立って仲間を導いていくためにＬＡを取ろうとする意志があったのだろう。ボスの前に立ち、仲間をこれからも守っていこうとした結果が彼の足を前に出させたのだろうか、と（半分以上は予測の域を出ないのだが）それを彼に確認をすることはもうできない。何故ならば騎士ディアベルは、その気高い意思と共にボス攻略戦の唯一にして最初の犠牲となったからだ。

▽

「終わった～…」
「ええ…終わったわ」
ボスと戦うことはないなと、気を緩めていられたのはわずかに数十分前。その間にボスと戦い、ボスと戦って、そしてボスと戦った（つまり疲れた）。しばらく動けそうにな

いH隊4人組。その後ろではトッププレイヤーたちの歓声が上がっているが、正直けだるすぎて起き上がろうとする気すらしない。
「あまり床に寝転ぶと汚くなるわよ？」
「VR世界の地面に汚いも、臭いもないよ」
嘘だが。実際フィールドに出て同じことをすれば泥とかつくかもしれない。でも、今だけは起き上がりたくはない。寝てたい。
「――なんでだよッ！なんでディアベルさんを見殺しにしたんだ！」
突如として後ろからそんな金切り声が飛び出してきた。キリトもその言葉に反応してエギルさんと拳を合わせようとしていたその手が止まる。金切り声を上げたシミター使いはディアベルのチームの初期メンバーの一人で、言葉をこうつなげた。なぜボスの技を知っていたのか、知っていたならディアベルが死ぬことはなかったのにと。そしてその言葉は当然のように
「お前らH隊ッ…俺知ってる！こいつらβテスターだ！だから知らない攻撃パターンとか、うまい狩場とか知ってて隠しているんだ！」
同じディアベル隊のプレイヤーから声が漏れる。ディアベルがこいつらに情報を売った…とは考えにくい。同じパーティーメンバーに自分の素性がバレるようなことはできないだろうし、リスクが高すぎる。っていうか

「えっ、俺も!?」

「そうだろ!そこの女助けるときに、敵の攻撃パターンが分かったから避けれたんだろうが!」

なるほど、確かに。こんなにも怒りのボルテージが上がっているのに的確に理由を言われてしまった。「あんたねぇ…」とシノンも隣で嘆息している。だって、分からなかったんだもん。

「でも、あのガイドブックにだって『これはβの時によるデータです』って書いてあっただろう。つまりここにいる誰にも分からなかったってことじゃないか?」

相変わらず相手の弱いところをついていくエギルさん。シミター使いも「そ、それは」と後ずさりしている。

「…じゃあ、あの情報屋が嘘をついたんだ!あいつも元テスターなんだし、ただで俺たちに情報を渡すつもりなんてなかったんだ!こいつらが、グルになってディアベルさんを…!」

そこまでテスターを悪い奴に仕立てあげたいのか。そこまで行くと誰かに責任を押し付けたいだけの幼稚な発言に見えてくるが、集団心理とは恐ろしい。それに納得する者も少なくない。これは…

「元βテスターだって…?俺をあんな素人連中と一緒にしないでくれ」

「な…なんだと?」

「いいか、ＳＡＯのＣＢＴ（クローズドベータテスト）はとんでもない倍率だったんだぜ。受かった奴らの中に本物のＭＭＯゲーマーが何人いたと思う?ほとんどが初心者だったよ。でも俺は違う」

キリトはそこで似合いもしない冷笑を浮かべる。

「俺が奴の刀スキルを知っていたのはもっと上の層で刀を使ったＭｏｂと散々戦ったからさ。他にもいろいろ知っているぜ。アルゴなんか問題にならないくらいにな」

ああ、そういう事か。やけにアルゴの下りを大きな声でしゃべったなと思ったのだが、それこそがキリトの心理。今よりβテスターには「情報を独占する汚いプレイヤー」と「素人上がりのプレイヤー」に棲み分けされた。その場で騒ぎ立てるプレイヤーが大きくなったところで誰ともしれず、キリトに≪ビーター≫という汚名を着せた。

キリトはそこで先ほどのＬＡボーナスらしき黒いコートをその場で装備して第二層のアクティベートに向かった。振り向いた時に「すまない」といった表情を見せたが、何かをしゃべる訳でもなく、第二層をアクティベートするべく、その場を去った。

しばらくの沈黙…

「で、あんたらは一体どうなんだ?」

まあ、見逃してくれるわけもなく…。そもそも、シノンとアスナに関してはβテスターという視覚的証拠は少ない。ボスの攻撃をパリィし続けていたのは俺とキリトだ

し、指示を出し続けていたのも俺たち二人だ。この場で二人にかけられる嫌疑を振り払うには…

（俺もビーターであるとここで言い張るしかない…か、あまり演技めいたことは好きじゃないというか、なんというか……下手糞だからなぁ俺）

おそらく、ここに残っている連中も本当に疑っているのは俺だけなのだろう。俺がビーターなのか、ただの元テスターなのか。そして俺がどちらを騙るのか。まあ、もっとも俺に残されている選択肢など一つしかないんだが。先のボス戦でキリトとほぼ同量の知識があることは見て分かったことだろう。ならば俺が「ただの元テスター」だと言ったところで信じてくれる者はいない。

もともと、このボス戦が終われば無くなる関係だった。そうだと知っていて色々と教えていたはずだ。シノンとはここでお別れだ。そう心に言い聞かせて、いざ…

「そうd…「ええ、そうよ。私は元テスター。でも、残念ながら彼の言った通り私はこのゲームが初めてのＭＭＯＲＰＧで全くの初心者だから、あなたたちに伝えられるものが何もなかった、ただそれだけよ」

「ええ～…」

最後に情けない声を漏らしたのは俺、全く知らない事実…いやそのブラフを吐き出した、その当人に顔を向ける。今まさに爆弾発言をサラッと言ってのけたホシ、シノンは

全く動じていない。彼女の目的が何なのかは分からないが、焦りも動揺も感じさせない物言いにその場にいる全員が固まった。
「ま、だからあのスキルが何なのかいまだに私には分からないし、これから出てくる敵がどう違うのかなんて全く分からないから、私の言う事に期待するのはよした方がいいと思うわ」
「ってシノン！おまっ…何言って」ヒソヒソ
「あなたはどうするの？」
その言葉が俺にピシャリと響く、俺はどうしたいのか。間違いなく言えることは、この世界で生きて脱出するためには、ここにいるプレイヤーだけではまず足りない。もっとはじまりの街でくすぶっているプレイヤー達の協力が必要だ。
ここでβ出身と初心者の間に大きな溝を作り出してしまうことは、間違いなく脱出を遠ざけてしまうことになる。キリトはおそらく、その溝を取り除くために己の身に初心者たちの憎しみを集めたのだ。であれば彼の身がどれだけ危険であり、また孤独であるかなんて簡単に予測がつく。彼が≪ビーター≫ならば俺もまた≪ビーター≫だ。分け合える器が二つあるのに偏らせて、背負わせてしまうのは、間違っている。
「俺はあいつ一人にこの世界を背負わせるほど臆病者でもないよ…シノン」
「…そう」

そっとシノンが笑いかけてくれる。それだけで力が沸いてくる。

「俺も元テスターだ。刀スキルのことはよく知っている。だが、今日のボスが刀を使うなんてことは知りえなかった。なぜなら俺はこの目で間違いなく一層フロアボスモンスターが曲刀を使っていたのをこの目で見たからだ」

本音を言い出し始めるときりがない、ディアベルが死んだ理由とか、デスゲームが始まって死んだプレイヤーの割合は実はβテスターの方が多いとか、ここで言っても意味がないことを言い出したくなるが、ここはぐッと我慢する。

「俺の言うことが信じられないのなら、それでもいい。でも、このゲームから脱出するにはここにいるだけじゃない、もっと多くの協力が必要だ。はじまりの街にいる素人同然のβ出身のプレイヤー、この世界に紛れ込んだ初心者たちの協力が不可欠なんだ。俺は人の命なんて預かることも預けようとすることもできない卑怯者だけど…でも！どうか、いつかこの世界にいる誰かがこの世界を脱出するための未来を…」

奪わないでほしい、と続けたかったのだが言葉が出ない。俯いてしまった俺にはこれ以上続けることが困難だ。情けない、本当に情けない。もう、いい年して（自分ではそう思っている）泣き落とすなんて…通じるのなんてもうとっくに昔の話だろうに。

俺の言葉がみんなにどのように通じたのかは分からない。だが、シノンがいつの日かしてくれたのと同様にまた俺の手をつないでくれた。

「…よく頑張ったわね。大丈夫、全部わかっているわ」
　脳の信号に過剰反応してんじゃないかと思うくらいに何もできなくなってしまった俺は、シノンに手を引っ張られる形でその場を後にした。

▽

「ううぅあああああ！」
「ふふっ、そんなに照れることもないじゃない。いいこと言ってたわよ？」
　今は先ほどのフロアボス部屋から数分経ち、まだ階段をのぼっている最中である。というか
（見られてしまった…！俺が！泣いてしまったところを！ぐぁあああ‼時間巻き戻んねぇかなぁあああ！）
　意外と元気だった俺とシノン。階段上では頭を抱え、羞恥に震度6の震えを引き起こしている俺をシノンが慰めるような形で立っている。なによりもシノンにあのようなところを見られたのが本当に恥ずかしい。ナーヴギアには喜怒哀楽をコントロールする機能が現実よりも顕著に表れるという事実を知りながらも、先ほどは止められなかった（何がとは言わないけどっ）。

「あんたって…もしかして私よりも年下ってことはないわよね？なんだか大人びてる感じはしていたけど、もしかして背伸びして…」
「やっぱり子供っぽく見られてたぁあああ！もういい！死ぬ！死なせてくれぇ！」
「それシャレになってないから」とツッコミを貰い、やっと心を落ち着かせることに成功した。そうだ、シノンには聞かなといけないことがあった。
「で、どうしてあんなこと言ったんだ？シノン」
「変わり身早すぎでしょ…あんた。…そうね、理由は簡単。気にくわなかったからよ」
「気にくわないって…どうしてまた。これじゃ、少なくともトップ集団のチームに入れてもらえなくなるぞ？」
「別にいいわよ、あんたと一緒に組むから」
「そうか、俺と…えっ？」
「正確にはアキとキリトとアスナと一緒に組むからいいわ」
「いやいや！今回の件で完璧に目を付けられたんだし…」
「それでも協力しないといけない…そう言ったのはあなたでしょ？間違いなくその通りだわ。考えたくないけど、今回みたいに一層ずつ死人が出ていたら最高でも半分の層までしかたどり着けない。それは誰もが考えることだし、〝小事に拘わりて大事を忘るな〟ってとこね」

「小さいことに事にこだわって、肝心なことを忘れるなってことか…。βテスターを仲間にするかこだわって、攻略がおざなりになってはいけないという心理が連中に芽生える…。そういうこと？」
「そういうこと、なにあんた結構勉強家だったりするの？」
「いや？…まあ、塾には行ってたけど」
「そう、とにかくアキやキリトを悪く言ったからって、攻略に入れないなんて効率の悪いことをあいつ等もしないってことよ」
「効率厨多そうだったし」と付け加えて不敵に笑うシノン。全く持って大胆なことをするなと改めて感じずにはいられない。
「それに私、悪いことから目を背けて良いことばかり見る人とか嫌いなんだけど、逆のことする人はもっと嫌。あいつら、せっかく一層をクリアしたっていうのに、すぐに突っかかってきたでしょ？ああいうの見ると…うん、やっぱり嫌」
「そ、そうか。うん、以後気を付けるよ」
「だから、これからもよろしくね。〝相棒〟」
「う～～～ん…うん」
やはりそうなるか。誤算だ。俺はついさっきまで〝これが終わったらメンバー解消だな〟とか嫌われる覚悟をして元テスターだと暴露しよう！とか考えていたのだが、や

はりこれは誤算だ。何がどう誤算かというと、心ではちょっとうれしいと思っているあたりが誤算だ。

「うん、これからもよろしく〝相棒〟」

初めて口に出して彼女に〝相棒〟といった。なんだか思い切りが良くて、不敵でクールな相棒が出来たことに9割ほどの不安が心に残っているが、残り1割が嬉しいと言っている。全く割に合わないし、全然収支の合わないパーセンテージではあるが、俺はそれでチャラにしてやろうと、そう思う。

▽

階段を上がり切った先のテラスに見つけたのは先ほどのボス攻略までパーティーメンバーだったキリトである。彼はそのテラスに腰を下ろしている。

「……来るな、って言ったのに」

「いやいや、言ってなかったよ。死ぬ覚悟があるなら来い、とは言ってたけどな」

「…よく聞いてたな。もうさっき言ったことすら、忘れてたよ」

「疲れてんな～アクティベート、俺がやってこようか？」

「魅力的な話だけど、いいよ別に。この景色をもう少しだけ眺めていたい」

そこに広がるのは絶景。たしかに今これを見ていられるのはここにいる三人だけなのだ。独り占めしたい気持ちにもなる。
「…キリトもβ上がりだったんだな。そういや、確かにＬＡをほとんど掻っ攫っていったって奴も、同じ名前だった気がするけど」
「ああ、それが俺だよ。情報を独占しようとする悪い元テスターが俺の本当の…」
「私たちにそれは通用しないわよ、キリト」
「…そうか、うん。お前たちみたいなのがいてくれるだけで救いがあるってもんだよ」
「ああ～。それなんだけどよ？キリト」
「？なんだ」
キリトが去ってからの出来事を簡潔にかくかくしかじか説明していく。さすれば
「おっまえ、アキ！お前もビーター紛いのことやったら、俺が体張った意味が無くなっちゃうだろ！」
「いやいやいや！そんな筋書きがお前の中にはあったのかもしれないけど、いきなりお前はアクティベートしに行くし!?他の奴らは俺たちを問い詰めてくるし!?面倒見るなら最後まで見てけっていうんだよなぁ、シノン!?」
「アキは泣いちゃうしね？」
「シノンさぁあああん!?」

「なんだ、アキ。お前泣いたのか？」
「な、泣いてねえし！シノンがなんか、いきなり元βテスターだとかブラフかましたせいで、こっちの調子が狂っただけだし！」
「全く…お前ら、この先苦労するぞ？」
「いいんだよ…どうせ俺はソロを続けていこうとし…ツデ！」セイケンヅキ
「あ・い・ぼ・うよね？」
「…ハイ」
　そうでした。俺のソロ道はシノンという相棒に阻まれ、コンビ道を極めていくのでしたね、ハイ。
「というわけ、なんだけどキリト。まずはフレンド登録させろ」
「はぁ？なんで…」
「どうせあっても困らないもんだろ？ほれほれ」
「…分かったよ。でも俺は滅多には使わないからな」
「こっちが使うからいいんだよっと」
　登録完了。どうせこの先もボス攻略は４人組になりそうだし、あっても損はない。
と、ここで後ろから違う足音が聞こえてくる。そろそろか…
「じゃあ、俺とシノンはこの層のアクティベートに行ってくるから。お前はもう少しこ

こでのんびりしてろよ！」
「いや、だから俺が行くからもうちょい…」
俺は指先を歩いてきた側に指す。そこには神速の細剣使いさんことアスナがこちらに向かって歩いてきている。俺とシノンにちょっとずつ築いてきた友情があるように、この二人にも二人にしか分からない〝何か〟があるはずだ。その何かを確かめ合うのに無粋な邪魔者は消えてやろうとする。俺ってとっても気配りさん。
「〝俺ってとっても気配りだな〟って考えてるでしょ、いま」
「…なんで分かるんですかねぇ…」
うん。これも友情（恐）！

▽

フロアボス討伐から一日。主街区≪ウルバス≫は大いににぎわっていた。初めてのボス討伐という一大ニュースがはじまりの街に届いたことは、みんなの活気を見るに、間違いなく意味のあるものだったと感じた。そう、感じたのだ。過去形であることはご察しのとおり、今は≪ウルバス≫じゃない。マップ上では二層の東の端に位置するところに俺とシノンは拠点を置いている。

「で、なんでこのクエを受けようとしたのかしら?」
「だって、昨日のうちに街の中で受けられるクエは終わらせただろ?もうレベル的にもマージンはとりすぎってくらいだし…」
「そうね、エクストラスキルだっけ?これは役に立つわ、ええとっても……この岩が壊せさえできればね」
「すみませんでした!」ドゲザッ
「すみませんで、済むわけないでしょ!?こんな破壊不能一歩手前の岩なんてどうすれば素手で壊せるのよ!?」
「分からないっす」
「分からないっす、じゃないわよ!この顔のペイントも取れないし!」
訂正：拠点を置いている、ではなく置かざるを得なくなっている。
今は昔、7層にて≪体術≫スキルなるものを二層で手に入れられることを知る若人一人。その者、期間内にて受けようと試みるも時間制限にて断念するも心残りあり。あ、じゃあ今受ければいんじゃね?と軽い気持ちで受けてみたが運の尽き。若人とその連れ、受けて思うこと、「これ、無理っすわ」
近年ゆとり世代とか何とかが、あきらめやすい傾向にあり、会社をすぐ辞める傾向にある、などニュースで聞いたことがある。俺はその部類の人間ではないと自分に言い聞

かせていたが、言わせてくれ。ＫＨＭ（これ破壊無理）。
「間違いなく、3日はかかるな……。へへっ、腕が鳴るぜ」キリッ
「へへ、じゃ…ないわよ！」ビンタ
まだ習得したわけではないもないのに、この時シノンさんが俺をビンタした威力は間違いなくソードスキル一歩手前だったと思う。

▽

～二日目夕方～
ガツ「そろそろ割らないとマジでやばいな…」
ゴツ「ん～ヒビまでは入るようになったんだけど…そこからよね」
前線から離れていることが二日も続くと流石に心配になってくる。イレギュラーなＭｏｂは出ていないか、キリトたちは無事か（メッセは届くけど）、心配は様々だが、なにより一番の心労は「本当にこの岩壊せんの？」っていうところだろうか。
もういっそのこと、この顔に塗られたペイントを背負い、生きていくことを決断するのも一つの手段だと考えていた時期もあったが、シノン曰く「今日からあなたの二つ名は〝アキえもん〟ね」とシャレにならないことを言うので、その考えは実行に移された

ことはない。
「ん～～～…」
「なに？いきなり岩をジロジロいろんな角度から見渡すなんて…ハッキリ言って今のあなた、かなり不審者よ」
「いやさ、思い出したことが一つあって…とある某漫画には岩を砕く技があって、その岩の〝点欠〟を突くことで粉々になるっていう仕組みの土木技なんだけども」
「あ～知ってるわ、それ。副次的に、砕いた岩が自分にぶつかったりしたことで打たれ強くなった、頭にバンダナ巻いてる武闘家が出てくる漫画でしょ？」
「そう、それ。つまりだよ、この岩ももしかしたら〝点欠〟なるものが存在していて、それを見つける能力を身に着け、岩を粉砕することこそが、真の目的なんじゃないかと思い始めてきたんだよ、ぼかぁ」
「…一回、精神科に行くことをお勧めするわ」
「きっと、茅場もあの某有名漫画が好きだったに違いない！きっとそうだ！うおおお、発眼せよ！心・眼！」
「ところで、アキ。私、お腹すいたんだけど、携帯食料まだ持ってるかしら？」
「うへぇ…俺ももうない」
ここ、体術スキル修練所まで来るのに、一番近い町から片道３０分はある。しかも道

中はそこそこ高レベルのＭｏｂも息をひそめているので、ソロではまず近寄らない。というか、ぶっちゃけ行って帰ってくるのが面倒くさい立地なのである。
「じゃあ、そこの湖からとれる魚でも焼いて食べましょうか」
「!?湖なんてあったのか」
「あんまり、言いたくはなかったけどね…」
「?」
最後シノンが何と言ったのかは分からないが、ＳＡＯではＭｏｂが食料となり得る素材を落とすことはよくあることだ。魚類系ならば、やはり塩焼きだろうか。実のところβ時代は一回も料理したことがないから、俺も初の試みに、この時はワクワクしていたのであった。
「あ、でも調理が…」
「調理は任せて、これでも家では一人でご飯作ったりしてるんだから」

▽

「…言いたい事があるなら言いなさいよ」ウツムキ～
「…うん、いやそのぉ～…ず、随分と個性的な見た目と匂いだな～って…うん、味は～う

ん。これから食べてみようかなって」

　眼前に広がるは大量の炭・石炭・木炭の3コンボだった。このＳＡＯは完全スキル性なので料理もスキルを上げないと、ただの塩焼きでも、失敗してしまうことは当たり前。まあ、ちょっとばかり、いたたまれないのは作る前にシノンが自身満々・クールに「私作れますけど？」的なことを言ってしまっていたが故だろう。

「いいわよ、食べなくて。流石に気を使ってまで食べるレベルの焦げ方じゃないわ…。ふ～、今度からちゃんと料理スキル上げようかしら…」

「いやいや、今はまだ下層なんだし、重要なスキルスロットを料理に割くなんてもったいないから」

　小さくつぶやいたシノンにすかさず助言する。まだ俺たちが持ち得るスキルスロット数は3つ、俺は≪片手剣≫に≪隠蔽≫、≪索敵≫だ。実に面白みのない構成だが、ＳＡＯ初期から上げておくべきスキルと言えば、最早これが鉄板だ。その数少ないスキルスロットに趣味系スキルを当てはめるなんて攻略を続ける上では以ての外だ。

「ま、そうなるわよね」

「うんうん」

　力強くうなづいて見せるが、これをもって今日の晩飯は抜きであることが決定的になった。

「「はぁ～～～っ」」

　周りは緑豊かな自然に、空は綺麗な夕焼けに、そして並び立つ二人の口から洩れるのは溜め息。二人の心は後悔に明け暮れるのであった。

「今日はもう寝るか」

「そうね、明日割れなかったら、いったん≪ウルバス≫に戻りましょう（食料を買いに）」

　腹が減っては戦はできぬと、よく言ったものだがまさにその通りだ。今日は一日中岩を殴ったり、蹴ったりしていたので、腕も足も何だか痛い気がする。ストレス発散には最適かもしれないこのクエスト。商売になるんじゃね？と思ったあたりで眠りに落ちるのであった。

▽

　ゴソゴソ…モゾモゾ…ぐぅ～…。端的に言ってお腹が減った。目が覚める。戦が出来ないどころか、眠りすらできないとは。どうやらアキの中の三大欲求のチャンピオンは食欲らしい。性欲？知らんな。少なくとも隣で（岩一つ分離れてだが）女の子が寝ている所でそんな下世話な話はしないでいただきたい！紳士ですから！

　そんな内なる心の会話をいったん止め、自分が出したモノではない音の発生源を見や

る。おそらくシノンだ。どうやら彼女も寝られないらしい。どころか一人歩きだして湖の方へ歩き出した。

（まさか…あいつ！）

俺は想像した。空腹に耐えきれなかったシノンが…生魚を貪る姿を…。

（空腹がここまで人を変えてしまうなんてッ）

半ば、冗談にそんなことを考えながらシノンの後を追っていく。湖まではそう遠くもなく、夜アンド隠蔽スキルのおかげで気づかれることもない。シノンのことだから、もしかして経験値を稼ぎにでも行っているのかもしれないと、いろんなことを考えていると、シノンの足が湖手前で止まった。なにやらキョロキョロと周りを見回している。

（何か探しているのか？）

ならば水臭いこと言わずに俺も誘ってくれればよかったのに。一人よりも二人の方が…。

瞬間、俺の目の前で、あり得ない光景を目の当たりにした！何とシノンがそこで上半身の装備を解除し始めたではないか!?そうか、シノンは水浴びに来たのだ！紳士たる俺がシクっちまった！

昼に彼女が言った、俺には湖の存在を知られたくなかったと。頭を働かせれば、こんなの予測できたではないか！俺は半ばラッキースケベ、もとい不慮の事故を回避するた

めに（紳士だからね！）即時シノンに背を向けて、戦略的撤退を敢行したのだが…ああ、なんということだ。

　誰かが言ったことを思い出した。曰く、〝主人公とはラキスケを起こしてこその主人公であると〟。確かに…リ○とか○夏とか、名だたる主人公はことごとくラキスケを起こしているではないか。

　話が逸れたが、端的に説明しよう。こけた。盛大にこけてしまった。ここで、主人公補正とやらが起動したのか、ただの俺の純粋なるチェリー心が足の動きを狂わせたのかは、定かではない。ただ奇しくも、この時初めてＳＡＯで〝転倒〟判定のダウンを取ってしまったという事は、それだけ動揺していたんだと理解してほしい。

「あん…っなに……そこで…っ！」

「あ、いやぁ～何というか…女神の誕生？的な…？」

「それは…ッ！笑えない冗談ね!!死んで頂戴ッ!!」

「いぁあああ！それＳＡＯ内じゃ、シャレになってないから！シノンさん！」

「問答無用！」

　シノンは怒りで我を忘れているようだ。まだ、上半身の下着を装備していない状態で、俺をコボルド王戦の時の数倍の眼光で睨みつけながら、追いかけてくる。

「訳を…わけを聞いてください！シノンさん！これは意識の高い俺の紳士魂が引き起こ

した偶然の事故で…」
「……！」
「ちょっとぉ！無言はやめて！マジで怖いからぁ！マジで怒ってるみたいだから！」
「マジで怒ってるのよ!!」
キィイン！
そう言い放つ、シノンの拳には剣に宿るはずのソードスキルのライトエフェクトが！
「シノン！右手、右手！」
「その手が通じるのは、小学生までよ！」
「違うっての（泣）！」
俺のＡＧＩではいつかシノンに追いつかれる。そして、今になってようやく表れたクエストクリアの要。どちらも早急に対応しなければならない事案だ…どうすれば、シノンに怒られず（おそらく無理）にあのスキルを岩に打ち込んでもらえるだろうか？ここで単純だが一筋の光明が見えた（気がする）。この作戦ならば、少なくとも岩を壊すことができるはずだ！
まずはシノンをこちらに誘導する。
「おいシノン！こっちｄ「知ってるわよ！」
残り、数メートル。俺の背後は行き止まり…ではなく、クエスト主から〝壊せ〟と命

ぜられた岩だ。シノンに岩を壊してもらう作戦に必要なのは、①に〝配置〟そして②に〝俺の回避力〟だ。

「こんのぉ！食らいなさい！」

今のセリフからも分かるように、俺にスキルを当てる気満々のシノンさん。だが、ナメてもらっては困る。

「ほっ！やっ！とりゃ！」

「避けんな！」ゴッ　ガッ　ドゴッ

目に自信はあるし、ただ避けるだけならば…できる！だが、まだシノンの拳の威力が足りないのか、岩がまだ割れない。ピシピシっと音はするのだが…。仕方ない、これだけは使いたくなかったが……。

「本当にすまなかった、シノン…。俺…実は、シノンの魅力に耐えられなくてあんなことを…」

「～～～～～ッ！なっ、何言ってんのよ！こんのっ…」

シノンのモーションに変化が、チャージするように拳を引く動作をした瞬間。シノンの右拳のライトエフェクトがより一層輝きを増す。

「バカぁあああ!!」

「今だ！ぶっ放せ、シノン！」

シノンが放った正拳突きは、岩に完璧にめり込む形でストップした。とたん、岩がラグり始めたかと思えば、綺麗なエフェクトを爆散させて消え失せた。そして、俺の目の前に突如現れたクエスト成功のウィンドウ。

「やったね、シノン！クエスト最高だ！」

イェーイとハイタッチを希望して手を掲げた。

「そこに座りなさい!!アキ!!」

「……はい」

作戦は失敗。あそこまで絶望しきっていたクエストの成功を達成できたならば、今回のことは水に流してくれるかな～なんて思っていたのだが、シノンは俺の期待など粉々に砕くかのようにぶち壊してくれたのであった。

2層～攻略・前～

沈黙が肌にチクチクと刺さる。およそ、3日ぶりの≪ウルバス≫もとい〝街〟ですよ。俺は昨日深夜から、今日の明け方にかけてまで床・フローリングではなく、地面・ＪＩＭＥＮの上に正座を強制されていた。もちろん強制させていたのは、隣をしかめっ面で歩くシノン様である。一夜にして相棒から主従関係にジョブチェンジした俺たちは、とあるお店に向かっている。長時間、執り行われた正座地獄だけではシノン様のお怒りは静まらず、お詫びをして差し上げろと、天啓が下ったので…。まあ、いつかはそこを訪れるはずだったので、俺的には都合がいい（シノン様のことが第一だが！）。

「ねえ、アキ」

「はい、何でしょうかお嬢様」キリッ

「なんなのよ。さっきから…その態度、行き過ぎは逆に鼻に触るんだけど。今度したらアルゴさんに〝ビーター紛いは女の敵〟っていう特集記事を無料配布してもらうからね？」

「それだけは勘弁を！」

ゲーマーとしての汚名を一昨日背負ったばかりなのに、今度は変態という男としての

汚名まで背負ってしまいそうになるのであった。

▽

俺たちが≪体術≫スキルをゲットしている間中、共通して思っていた事。それは、早くちゃんとしたご飯が食べたいという事。修行中は持ち込みの簡易ご飯：レーションを食していたのだが、あまりの味気無さに、街に繰り出して『アキえもん』という名前を本気で背負おうとしたことさえある。俺たちにとってＮＰＣレストランで食事をとるのは3日ぶりの食事だと言っても過言ではない。

メインストリートから左に曲がったり、右に曲がったりでようやく着いた目的地。

「お、良かった～場所変わってない。着いた～」

「あ～良かった。急に人気（ひとけ）のないところに入っていくから、どこかの変態に襲われるんじゃないかと思ったわ」

「……」

ひどいっ（泣）！あまりに辛辣な物言いに無言という、いち物語を語る者としてあるまじき反応をしてしまった俺だが、言わせてほしい！シノンさんは妙に博識なところがあるせいで、俺に放たれる嫌味も語彙力によるレパートリーがすごい。正直ここまで来

るのに、吐かれた嫌味で俺のＨＰはＺＥＲＯなのだが…。
「…あ、ちょっと言い過ぎたかも…。気を悪くしないで」ウワメ
…新手のツンデレか！さっきからこの調子なのである。物凄い罵倒を受けてＨＰが減らされたかと思えば、ちょっとデレ？てくる発言でヒールを繰り返す（たぶん言い慣れていないのと優しい性格だから）。何回蘇生したかは、１０を数えたあたりから数えるのをやめた。
「い、いや…別に気にしてない…から」
悲しいかな、耐性がなさ過ぎて俺流・暗視状態（効果：相手の目が見れない）に陥っている。
「とにかく入ろう。そうしよう」
穴場レストランは俺がβ時代に見つけて常連となった、思い出の場所。いつも同じカウンターにいるＮＰＣに「彼女でもできたのか」と言われそうなシチュエーションだが、生憎（あいにく）そんな反応は返ってこない。誰かと一緒に来るなんて考えもしてこなかったが、隣に誰かがいるというのも悪くないと、そう思った。

▽

「で、ここに連れてきた理由は？」
「もちろん、人気がないから！というわけではなく、お詫びだよ。お・わ・び」
「はぁ？今朝方のことなら…癪だけど許したわよ。…ま、ちゃんと何するか教えなかった私も悪かったし」
　語尾につれて声が小さくなっていく。かわいい（確信）。…ではなく。
「いやいや、そのお詫びじゃなくて…。って反省してないわけではモチロンないんだよ!?でも、今回のお詫びはさ…一層の時に約束したじゃないか」
「？」
「はは、覚えてないか。それなら、それでもいいんだけど。『ウルバスでうまいケーキ奢ってやる』ってさ」
「ああ！私が発作で倒れたときね？…あんた、よく覚えていたわね」
「まあ、一方的に約束したからな。それに俺もここのケーキがそろそろ食いたいなって思ってたし」
　よかった、シノンが発作を気にした様子もなくて。
「今日は俺の奢りだから、遠慮なく食ってくれ」
「はいはい、ありがたく頂くわ」

▽

≪トレンブル・ショートケーキ≫。≪トレンブリング・カウ≫というフィールドの小ボスから摂れたミルクを使用している設定のホールケーキだ。その値段たるや…。
「高くなってる…だと?」
お値段的に0が一つほど増えている気がしてならない、全然ショートじゃないケーキ。ホントは二皿程注文しようとしたのだが、これからポーションやら道具やらを買い備える身としては、少々手が出にくい。ここは断腸の思いで俺の分をあきらめるしか…。
「うわっ、高いわね～…。これ、大きさはどのくらいなの?」
「えっ、たしか大きさは…サッカーボール程度の直径の円に8センチの高さって感じかな?」
「そう……2／3あげるわ、あんたに」
「!いいの?」
「ええ、私甘党じゃなくて辛党なのよ。どっちかというとね」
「あ…そうか。じゃ今回のはあまりお返しにならないかな」
「そういうわけじゃないわ。こういうのは〝もの〟よりも大事なのは〝気持ち〟よ」

「そうでしょ?」と付け足し、俺を諭してくれるシノン。気になる訳わけじゃないけど…本当に気になるわけじゃないけど、やっぱり俺よりも年上なんじゃないだろうか。こういうことが言える女の子は、俺の周り(元々いないけど)で見たことがない。ただ、大人びているのか、俺みたいに背伸びしているのかは分からないが、ここで女性に年齢を聞くようなKY行為はしてはいけないという事は、俺にでも分かるのでしない。

そこでようやくケーキのお出ましときた。でかい。値段に比例したのか、でかくなっていやがる。実はまだ朝食を食べていないのだが、ご飯の前の間食を怒る人はSAOにはいないので順番は気にしない。この大きなケーキをご飯にするも良し、デザートでお腹を満腹にするも良し、人それぞれだ。

シノンが2/3にケーキを綺麗に切り分け、大きい方をくれる。片手には不恰好に大きいフォーク。ケーキはものすんごい量のクリームでコーティングされているので簡単にスポンジまで届かない。甘党である俺には夢のようなケーキなので淡々とケーキを食べ進め、神速で半分くらいをペロリと平らげた。しかし、その俺の早食いに追いつく者が一人いた。ていうか、この店には俺とシノンしか客がいないので、その主とはシノンのことなのだが。

(??シノンって甘いの苦手なんじゃなかったのか?)

いくらなんでも、男であり、甘党であり、成長期男子であるこの俺に追いつく速さと

はこれいかに。流石に違和感を覚えるのだが…。
「…シノン食べるの早いね…？」
「そ、そうかしら？」
なぜか疑問形で語り掛けてしまったが、今の反応で分かるようにシノンも動揺している。う～んこの反応が示す答えとは…。とりあえず
「まだ、おなか減ってるんじゃない？なにか頼もうか？」
「いいえ、いいの私あまりおなか減ってないし！」
シノンにしては珍しい。何が珍しいって、いつも腕組みを忘れずにする彼女が、今だけはジェスチャーで腕を左右に揺らしながら否定していることだ。明らかに動揺…グ～　ガスッ
整理しよう。どうやら、お腹もまだ減っているようだ。お腹が鳴って、顔を朱色に染めながら俯くシノン。俺の足へすかさずダメージを与えるシノン。キコエテナイヨ。
しかし、いまだケーキもといご飯を食べない理由が分からない…。今日は俺の奢りだからって遠慮するような性格でもなさげだし。女の子が食べない理由ってなんだ??
そこで、第一層フロアボス戦以来に俺の頭に電流が走る（こんな事でかよ！）。女の子が甘い食べ物を絶食する理由？そんなもの日本のサブカルチャーに浸っていたら簡単に分かることではないか！確かにこれを現実世界で目にすることなんてないと思って

いたが…どうやら実在したようだッ。

しかし、気の利いたことが言える気がしない。時間が経つにつれてケーキの耐久値も減少していく…。ええい！ままよ！

「コホン、ええシノン？ＳＡＯ内で甘いものをいくら摂ったところで太ったりしないよ？」

最高の笑顔を載せて…シノンに優しく語り掛けた。顔をゆっくり上げてくれたシノン。どうやら俺の言いたいことは伝わったようだ。シノンも最高の笑顔を見せてくれている。そして

「この…Ｎｏｎデリカシー男！」

間違いなくここが≪圏内≫でなければシノンはオレンジプレイヤーだったろう。ここではそうであったとだけ伝えておくことにする。ちなみに、いつの間にか俺の残していたケーキは無くなっていた。いいか、〝いつの間にか〟だ。異論は認めん！

▽

かる～～いトラウマを抱えながらＮＰＣレストランを脱出した俺。きっと何もなかった。はい、この話はもう終わり。今は主街区≪ウルバス≫で予定通り武器の手入

れ、買い溜めをしておくことにする。
「で、アキはこれからどうするの?また、何かのクエストを受けるのかしら」
「いんや?準備が終わったら迷宮区に入ろう。そこでシノンには訓練してもらうから」
「訓練って…何の?」
「もちろん、フロアボスの。この層のフロアボスは少し特殊な攻撃をしてくるからね～。でも、その攻撃は下位互換のＭｏｂも使ってくるから…」
「それで、特訓ね…。ふう、この層に来てから修行しかしてないわね」
「スミマセンデシタ」
「いいわよ、結局はしないといけないことだしね。それに今は身体を動かしたいわ」
「それってダイエッｔ「ん?」何でもないです…」
危うく先ほど埋めてあった同じ地雷を踏み抜きそうになるが、なんとか踏みとどまった。ギリセーフ。と、やり取りしていると…メールが届いたアイコンが。アルゴからだ。
『ヨウ、元気してるカ。実は…』
「ふむ、怪しいな。確かに」
「なにが?」
「シノン、いったん修業は後回しでもいいか?」

「？」

どうやら、新しいクエストの予感。

▽

「お～イ、アッキーにシーちゃん！コッチだゾ～」
「おい～っす、三日ぶりだなアルゴ」
「久しぶりね、アルゴ」
「え、呼び捨てする仲!?おい、シノンあまりアルゴに関わりすぎるなよ？いろんな情報すっぱ抜かれるからな？」
「そう、じゃあアキの情報全部くださいな」
「１０コルだナ」
「安っす！え、安っす!!これじゃポーション一つすら買えねえよ！」
「シーちゃん特別プライスなんだナ、これが」
軽口から入っていく俺たち三人。俺にとって本当に数か月前まで、あり得ない光景だが今はそんなことを気にしている場合じゃない。
「それにしても、こっちはうまくいってて何よりだナ」

「「？」」
「で、二層攻略につながるクエストだって？」
「そう、実はクエスト自体発生したのが今日の深夜、たぶん一時くらいだナ。発生条件は分からないが、今までウンともスンとも言わなかったクエストボードに新しい項目が追加されたんダ」
「〝老師の岩下神殿にお使いを〟これがクエスト名？」
「ああ、どうやら本当に新しく追加されたクエストみたいだな…。でも、何をお使いすればいいんだ？それくらいは掴んでるんだろ？」
「別途料金になるゾ？」
「いいよ。攻略のためなら、いくらでも」
「ウソだヨ。これはβにはなかったクエスト…だからオイラに払う金があるなら準備万端にして挑んでくれっていう話ダ」
「？お前は受けないのか、このクエスト」
「ああ、オイラには今先約がいるんだナ。これが」
「誰かしら？」
「そいつは１００コル」
（俺の全情報よりも高い!?）

「はい」チャリーン
「まいど～。ま、隠すような事でもないしナ。オイラは今からアーちゃん（アスナ）に頼まれて、もう一つの二層攻略情報クエに挑むんダ」
「なるほど…お前が片方のクエを誰かに渡すなんて…結構、切羽詰まってるてことか…」
アルゴはβ時代誰よりも早く、正確な情報を売ってくれたものだ。しかもその秘匿性は、俺でも信頼を置けるほどに高い。β時代≪鼠≫と呼ぶ前は検索エンジンみたいな奴だなと、ずっと思っていた。
「ま、そうだナ。おそらく攻略トッププレイヤーは、あと一週間以内にボス部屋を叩くことにナる。なら、情報が得られるなら早い方がイい。それにアッキーなら無償で受けてくれると思ったしナ」
ニシシッと笑って見せるアルゴ。彼女には本当に頭が上がらない。アルゴは攻撃型ビルドではなくＡＧＩ全振り所謂（いわゆる）、隠密に長けたスキル構成を取っているはずだ。ゆえにＨＰが低いことは明らかで…。
「そう思いつめた表情するナ。オイラの逃げ足の速さは知ってるだロ？」
「はっ、誰が思い詰めてるって？どうせ心配してもコッチのいう事なんて聞かないなんて知ってるし、心配損になるって俺は分かってるんだからな」
俺には俺なりにβテスターとしての役割があると思っている。彼女にもきっと〝そ

れ〟があるのだろう。俺だってきっと、誰かに「やめろ」と言われてもやめないように、彼女に俺が「やめろ」と言っても聞かないのは道理だ。ならば引き留めない。

「死ぬなよ」

「ほいサ」

これで十分、俺たちが元々仲が良かったことなんてことはなかったのだから、これぐらいの距離感で十分いつも通りだ。

クエストの詳細をくれたアルゴに礼を言って俺たちは二層の迷宮区に向かった。その時、後ろを歩いていたお姫様が

「…なによ、二人だけの世界に入っちゃって」

と、少しむくれていたのは誰も知らない。

▽

キンッ　キンッ　キンッ

「シノン、≪ナミング≫来るぞ！思いっきり下がれ！」

「了解！」

ブモォオオと咆哮を上げて、俺たちが敵対しているミノ系Ｍｏｂ≪レッサートーラ

ス・ストライカー≫は両手用ハンマーを地面に叩きつけた。叩きつけた先からは揺れが可視化されたような波が出てくる。それに触れるとたちまちプレイヤーである俺たちは〝転倒〟判定を食らい。二度食らえば長時間動けなくなる〝麻痺〟のデバフにかかる仕組みになっている。

「ナイス！タイミングつかめてきたな！」

「まだまだ！」

そこからはミノが気の毒になるほどの高速連撃＆クリティカルの応酬ですっぱり消し去る。

「さすが、もう免許皆伝だな」

「まだまだ…アキに指示貰わないとタイミングが合わないし」

「まあ、そこは経験だよ。必ず技には予備動作があるからな。それが何なのかを見極めるのが、このゲームの醍醐味でもあったんだけど」

「今では、〝余計なこと〟をとしか思えないわ」

「だよな」

この世界の創造者に文句を言いながら、次の≪レッサートーラス・ストライカー≫のポップを待つ。

「で、アルゴから貰ったクエストはいつ進めるのかしら？真っ先にこっちの訓練に来

ちゃったけど…」
「う～ん実際、何にも分からないっていうのが現状だからな～」
　アルゴとのやりとりから3日経ち、いまだにクエスト攻略が進まない俺たち二人組。ちなみに受け取ったクエストの内容はこうだ。ある目的地（岩の下にあるらしい）に7つのヒト型人形をお供えに行くというクエストらしいのだが…そのお供えものをアルゴは6つまでしかゲットできなかったらしい。さらに言うと〝岩下〟というのがどこのことなのかも分からない、とのことなので正に行き止まりという感じだ。
　いや、この話はどこかで聞いたことのあるような気がするのだが…
「この話ってどこかで聞いたことのある話なのよね～」
「お、なんだシノンも同じこと考えてたんだ。ということは、何か元になる原典があるのかもな～」
「そうなの？」
「こういうクエストってのは大体、人が作り出したオリジナルの物語か、原典となる話から引用してその物語に巻き込んで作られるもんだよ」
「ゲームをよく知らない私が知っているかもしれないっていう事は…」
「そう、シノンはこの元となる本を読んだか、見たかしたってところだろうな」
「「う～～ん」」

シュ～ン

「お、ミノがリポップした。狩るぞぉ～」

「ま、今は考えても出てきそうにないわね…。ところで、アキ?今日の特訓が終わったら、また≪トレンブル・ショートケーキ≫食べに行きましょう?」

「えっ、あのクソ高いヤツ!?」

「このミノタウロス、かなりコル稼ぎにいいみたいだし、今度は割り勘よ?」

「う～ん…じゃあいいけど?」

「よし、それじゃとっとと片づけちゃいましょ?今日はふかふかのベッドで気持ちよく眠りたいしね」

「…っ」

うおっ、まぶしっ!今から巨躯な体を持つミノを狩ろうというのに、このはじける笑顔は何ぞや?これだから貢ぐのは…、止められない止まらない。まるでお菓子のフレーズだが、圧倒的女性プレイヤーの少ないＳＡＯで、この俺がシノンと共に行動できてるのは本当に幸運だと、しみじみ感じるのであった。この日最後の狩り対象となったミノさんは、残念ながら最速記録をマークする速さで狩り取られました。お悔やみ申し上げまする。

▽

「はぁ～おいしかったわ。ここの層にもう拠点を置いちゃおうかしら」
　シノンさんにおいしく頂かれたのは勿論ミノさ…ではなく二度目の≪トレンブル・ショートケーキ≫だ。
「シノンってやっぱり本当は甘党なんでしょ？」
「うっ、そうよ。この間のことは忘れなさい。辛党っていうのも間違いじゃないんだけど、デザートは別腹って言うでしょ？」
　なんだか別腹の意味が違う気がするが、あえてそこはスルー。俺はこの間、無視してしまっていた現象に目を向ける。
「なあ、今さＳＡＯ内でβ時代にはなかった≪幸運判定ボーナス≫ってのがバフとしてかかってんだけど…試したいこととかあるか？」
「≪幸運判定ボーナス≫ねえ。ホントは素材とかのドロップとかが良くなったりするんでしょうけど…。流石に今日は疲れたわ」
「じゃあ、俺に付き合ってもらってもいいか？」
「まあ、やることないしね。いいわよ〝相棒〟」
「ウッシ、じゃあまずは道具屋に…」

そこからは俺の予想通り、こんな効果の表れが分かりづらいバフをどうやって消費すればいいか頭を使った結果。

『こちらの回復ポーション１０個を景品として受け取ってください』

『今回に限り、お客様のお買い上げする商品は3割引きとなります』

「なるほどね～こんな感じで効果も表れるってわけね」

「ま、あのレストランからじゃフィールド出る前に効果切れちゃうし、なにか違う効果が機能として隠されてんじゃないかと思ってさ」

「ホント、よく頭が回るものだわ」

「こういう発想ができるようになれば、シノンも一人前だぜ？」

「はいはい。でも私には必要ないわね」

「え、そうなの？興味ない？」

「だって私にはあんたがいるじゃない」ドーン

戦艦：Ａｋｉ…沈☆没。船を擬人化させてみたのだが伝わっただろうか。…ってそうじゃない！冗談抜きに体温が４０度まで上がった。リアルの俺の体は汗をかきまくっているだろう。こういうことを無意識に（あるいは意図的に？）言ってくるからシノンは怖い。ハッキリ言おう！思春期男子の心臓に悪いです。

当の本人は気にした様子もなく。

「今日は≪ウルバス≫の宿屋に泊まりましょう?.もうお腹もいっぱいだし、昨日も今日もミノ狩りで疲れちゃったわ。瞼がもう閉じちゃいそう」ノビ～
「そうだな、考えても出ないもんは出ないし、糖分はちゃんと補給したから明日には何か思いつくかもしれない」
　こっちの気も知らないで、という気持ちは表には出さない。これが〝シノン〟という女の子なのだから、俺が彼女に合わせていかなければ。

▽

「「え、今なんて?.」」
『ただいまお部屋は一部屋しかご用意できません。それでも構いませんか?.』
　ＮＰＣの機械音が無慈悲にそう告げる。構います。大いに構いますとも!年頃の男女が同じ部屋で寝るとか、あり得ないし!.なんだ、まだ≪幸運判定ボーナス≫のバフが付いてるのか?俺の幸運が今の状況を作り出したのか?だとしたらいい迷惑だよ!
「どうする?.ちょっと遠いけど隣の町まで移動するか?.」
「冗談じゃないわよ」ワナ　ワナ
「でも、それじゃ野宿くらいしか…」

バッとシノンが俯きかけていた顔を上げる。何事か、と思いきや超特大の時限爆弾を投下した。

「ここからの移動だなんて冗談じゃないわ。いいわ、一緒に泊まってやるわよ！」

「え、えぇえええ！」

シノンさんが啖呵を切った相手はＮＰＣ。決意した勇者のような顔つきしてるけど仲間の意見も尊重しような、ひとまずは

「俺の意思は…？」

▽

「ふ～っ今日は疲れたな～」

思い起こせば今日もとても濃い一日だった。ミノを狩り、ミノを狩って、ミノを狩った（ミノしか狩ってない）。今日のドロップアイテムは角だとか諸々だ。そして極めつけの

ゲシゲシ

「あんた、何ベッド全部を占領してんのよ」

俺を足蹴にするのはシノン。俺はコロコロ回転してベッドわきまで追いやられる。

「いいじゃないか～ちょっとの間～。どうせ俺はこのあと床に野宿セットを敷いて眠るんだから～。今くらい寝かしてよ～」

俺は当然そのつもりでシノンの決断についてきたわけなのだが…。

「何言ってるのよ。あんたもベッドで寝ればいいでしょ？」

「？ぱ、ぱーどぅん？」

「なによ？」

「ｐａｒｄｏｎ？」

「発音じゃないわよ。あんたもベッドで寝れば？って言ったの」

「いやいやいや！流石に年頃の男女が同じベッドで寝るというのは…っ。ちょっと無防備過ぎない？」

「それこそ愚問ね。私に何かしようとしても、システム的にできないはずでしょ？≪黒鉄宮≫に飛ばされたいわけでもないだろうし…」

「それとも」とシノンは続ける。

「あんた、私にひどいことするの？」

その言い方はずるい。そもそも、俺にはそんなことをする度胸もなければ、脳すら持っていない。ここを肯定することはまず、ないのだが。

「いや…そんなことしないけどさ」

「なら大丈夫ね。私は左側、アキは右側ね。一応、国境線は真ん中だけど寝返りとかは仕方ないからセーフで、ね」

ほら、一気に話が進んだ！シノンと組んで俺は学んだことが一つ増えた。シノンに言葉で勝つことは難しい、と。

気を取りおそう。事実俺はいくら思春期真っ盛りの男子だからって女の子に手を出したりするなんてことは絶対にしない。それにシノンは悪く言えば無防備、善く言えば俺を信頼してくれているんだから間違いは起きるわけがない。ならば、問題はないのではないか？俺の考えすぎなのではないか？と思い始めてきた。

「それじゃ私シャワーに入ってくるから…覗いたら即≪黒鉄宮≫行きだからね」

そう言って隣のバスルームへと入っていくのであった。うん、無理かもしんない。

▽

はい、もうベッドの上です。もうシノンさんは眠っていらっしゃいます。俺？俺は隣で女の子が眠っているという状況が辛すぎて、部屋のロッキングチェアに座っております。もちろんシノンが眠ってからだが…。

（明日にはどうにか、クエストのヒントだけでもゲットしたい。そのためにもこの〝七

人目の人形〟のありかと〝老師〟がどこにいるのか見当をつけないとな）

明日のことで頭を一杯にさせていると不意に

「…かあさん……おかあさん。いやぁ……行かないで」

シノンは夢を見ているのだろうか。でも、あまり楽しそうな夢じゃない。体は完全に寝返りを打ち俺が眠るスペースはない。でもそれでいい、彼女はＳＡＯに捕らわれてからというもの、俺の前では弱音を吐いたことは一度としてない。それどころか俺に肩を並べようと一生懸命ついて来ようとしてくれる。本当にそれだけが、ただ嬉しかった。

「きっと、無理…してんだろうな」

今だけは、夢を見ている間だけは彼女の心が休まる時間でありますように…そう祈るようにシノンの頭をなでるのであった。そうして夜は更けていく。

▽

「う…ん」

朝が来た。俺が眠れたのは3時間少々だろうか、この状態では充分眠れた方だろう。今声を出したのは、俺が起きてから３０分経ってようやく起きたらしい我が相棒シノンの声だ。

「おう、おはよ」
「!?あ…あんた!」
「??」
「なんで私と同じ部屋にいるのよ!?」
パァアアン　今日も一日!楽しい出来事が待ち構えていそうだＺＥ!

▽

「理不尽だ…」
「今回ばかりは私に非があるわ。ごめんなさい」
「ですよね!?」
ま、寝ぼけて俺をビンタしたことは、もう水に流すとして…。今日一日の流れを整理する。
「今日はクエストのお使いをクリアして人形をひとまず集めきることに専念しよう」
「ＯＫ。じゃあ早速行きましょうか」

▽

おつかいは呆気なく終わりを迎えようとしていた。まだ午後3時前だがアルゴが到達したという6人目のヒト型人形が完成しようとしていた。

物語としてはこうだ。このクエストＮＰＣはヒト型人形のお供えを神殿に持って行きたいのだが、神殿には強力なＭｏｂがいて、まず近づけない。それどころかＭｏｂがこちらの世界にまで侵食してきそうだったので、心優しい仙人様が大きな岩でその神殿へと続く入り口を塞いでしまったそうなのだ。

ちなみにお供えは旅の強いお方（プレイヤー）に渡すことが習慣化しているらしい。そしてそのお供えをゲットするにはお使いをして、そのヒト型人形の材料集めから入るという、なかなか手の込んだ設定に、本格的な話なのであった。

そして6つ目の人形が完成した。

『旅のお方…これで準備は整いました。あとはこれらを神殿に届けては下さいませんか？』

ここでクエスト進行マークがＮＰＣの頭の上に表示される。ここで「ＹＥＳ」といえばクエストは次の段階に進めるのだが…

「アルゴの言った通り7人目の人形は手に入らなかったわね」

「ああ、どこかで手に入れるイベントでもあるのか?それとも俺たち自身がそうなのか

…」

「どういうこと？」

「こういうクエストの穴っていうのは、結構あるんだ。シノンもよく覚えといて。確かにお供えするのは人形なのかもしれない…。でもヒト型っていうのがどうにも引っ掛かる言い方だ。なぜなら俺たち自身もヒト型であることには変わりないからね」

「つまり、７人目の人形っていうのは私たち？」

「の可能性が高い」

「ええ…、たしかに筋は通っているかも」

「ま、いくら考えても間違いの可能性もあるし。今日のお使いはここまでにして残り時間は仙人様を探そう」

「了解」

クエストＮＰＣに対して「届けさせていただきます」と答えて見せると、クエストが再び進行し始めた。

『ありがとうございます。でしたらどうか、今日は私たちの家にお泊り下さい。もてなしを心ばかりですがさせていただきます』

それを快く快諾した。俺たちは、ここからこの家周辺をくまなく探し回り、ＮＰＣがいたら積極的に仙人の居場所を聞き出そうと奔走したのだが…。今は村の踊り場でべ

ンチに腰を下ろしている。
「誰一人知ってる人はいなさそうね」
「そうだな～こんな手詰まりになったクエスト初めてだ」
「それにしても仙人も仙人よね。心優しいにしても入り口までどこかに移しちゃうなんて…ホント余計なことするんだから」
「まあまあ、それがクエストってもんだから」ピロン「ん?アルゴから?」
アルゴから送られてきたメールの内容には、正直焦りを禁じえなかった。なぜなら
「明日の正午にフロアボスの攻略を始めるだって!?」
「うそ!?まだ二層に来て一週間しか経ってないわよ?」
「まあ、レベル的には一層でみんな相当レベル高かったからな…。そんなことよりも早くこのクエストをクリアしてみんなに情報を共有しないと」
現在時刻午後6時。今日は徹夜コースがほぼ確実のものになった。シノンにも提案しないと
「シノン、今日はひとまず寝よう。残念だけど今日は徹夜コースだ。今からできるだけ眠って24時に仙人探索に出掛けようと思う。もし明日の午前10時までに間に合わなかったら諦めてボス攻略のために迷宮区に飛び入り参加、でどう?」
「はぁ、そうなるわよね。ええ異論はないわ」

「じゃあ、ご飯と寝にさっきの民家に帰ろう。…おろ？」

コロコロとシノンの足元に球が転がってくる。それをシノンがつかみ取ると、その素材が毛糸であることが分かる。すると球を追いかけてきた小っちゃな女の子が

『お姉さん、それあたしのなの。返してくださいな』

クエストＮＰＣのマークを引っさげた女の子だ。これから何が起こるというのだろうか。

「ええ、これ貴方のものなのね？上手じゃない」

『お姉さんも毛玉とか好きな人なんですか？』

「毛玉が好きというか…まあ、編み物は好きよ？」

ＮＰＣと会話しているはずなのに、こちらの会話に柔軟に対応してくる少女。まるで人間みたいだ、少なくとも街の一通りの会話パターンしか持たないＮＰＣとはわけが違う。

『そうですか、ではその毛玉。お姉さんにあげますね。十分に活かして使ってください』

『それでは』と言って少女ＮＰＣは走り去っていった。

「ええっ？ちょっと…。こんなのいきなり渡されても」

「まあ、貰っといてもいいんじゃないか？容量はまだ残ってるんでしょ？」

「そうだけど…なんだったのよ…仙人の居場所を教えてくれるのかもって思っちゃった

じゃない」
「同感。ま、ホントにその毛糸が役に立つ日が来るかもよ?」
「その時はあなたのマフラーでも編んであげるわ。どぎついピンク色のね」
「マフラーは欲しいけど、ピンクは勘弁な」

▽

～24時～とうとうフロアボス攻略までのカウントダウンが始まる。今は集合場所の村の踊り場。
「おはようシノン」
「おはよう…とは言えない暗さね、アキ」
「まあ、そう言わないで」と苦笑しつつ、仙人がいるであろう所に目星をつけていく。
「考えてみたんだけど…実際、心優しい仙人ならどこに作ると思う?アキがもし、仙人になり切ったとしたらどこに作る?」
「う～ん……人目につかない所かな?寂しいけど誰にも迷惑が掛からないし、被害も小さく済みそうだし…」
「じゃあ、人里近辺は除外ね。…っていう事は必然的に街も村もない外周近くにあるこ

とになるけど…」
「無理だよ。外周を一周するなんて一日あっても足りない」
「そうよね…じゃあ違うアプローチが必要か……」
しばらく間が空く。俺も一生懸命頭をひねらせるが良い案が出てこない。シノンは集中して右手を唇に当てながら考えている。
「じゃあ、クエストができるシークエンスをまとめましょう。アキ、新規クエストができる過程は知らないかしら?」
「新規クエストが出来あがる条件?……やっぱり何かを〝達成した〟からじゃないか?おそらくシステムが〝この先に進めるための条件はそろった〟っていう判断をするためにも、さ」
今日のお使いクエストもそうだ。材料を獲得したからこそ進められた、という事は〝材料獲得〟が目的であり、それがＮＰＣの前に提示されたからこそクエストが前に進んだのだ。
「なるほど、アルゴは確か今から4日前の『深夜一時くらいに急に発生したクエストだ』と言っていたわね…。だとしたら、そのとき誰かがクリアしたクエストがキーになる…」
ブツブツ呟くように独り言を吐くシノン。どうやら俺では思考が追いつかない。

「ねえ、クエストで私たちが受けていないモノなんてあったかしら？」
「いや…ない…と思う。俺たちはいち早くこの層にたどり着き、おそらく文字通り、最速ですべてのクエストを終わらせていた…はず」
「待って…4日前の深夜ってなにかあったわよね？」
「え、俺としては忘れることのできない出来事だったけど、シノンが『忘れて！』って言うから…。え、思い出してもいいなら思い出すけど…いいの？」
「あー思い出したわ！だからあなたは思い出さなくてもいい！私の裸を見た事は思い出さなくてもいいから！」
　しっかり根に持っているようだ。事故なのに…。でも、一昨日か…他に何かあったとすれば…そう、当然忘れることのできない
「≪エクストラスキル≫獲得クエストの成功！」
「それよ！それだわ、アキ！」
「ああ、オレたちがあのクエストをクリアしたからこの〝お使い〟イベントが解放されたんだ！」
「しかも、あのクエストのＮＰＣは…」
「白髪のひげ面！仙人っぽい！さらにはずっと降りようとしないで、座り続ける岩があった！」

「場所的にも東の端っここで人目につかない！」
「ここで決まりだ!!」「ここで決まりね!!」
俺たちはあまりの興奮に立ち上がり、深夜だというのに大声を上げていた。間違いなくリアルなら警察に厄介になるやつだ。でも気にしない。
「早く行こう！中は神殿っていうくらいだから迷宮になっているはずだ！」
「ええ！ふふっ」
「なに、どうしたの？いきなり笑いだして？」
「いや、なんだか今のすごく楽しかったなって」
やめてください。その笑顔は俺に効く。思春期の俺に効くから、やめてください。と俺は顔を紅潮させていることだろう。ま、まだ辺りは暗いし、恥ずかしがっていることはバレないだろう。このとき見たシノンの横顔に少し赤みがさして見えたのは、見間違いだろうか。

▽

「着いたわ！」ハァ　ハァ
「うっし！早速、老師の下にある岩を壊そう！」

ここまでかかった時間は全力ダッシュ＆Ｍｏｂをゴリ押し戦法で倒してきたことを考慮しても、早かったと言えるだろう。今は午前6時。暗闇の中を≪索敵≫スキルで何とか突破してきたのだ。これ以上の結果は望めない。

そして目的の≪エクストラスキル≫の伝道師。その仙人は今も岩の上に座っている。俺たちは免許皆伝（クエスト成功者）なので仙人ＮＰＣは俺たちに反応を見せない。

「シノン…いっせいのせっで≪閃打≫を打ち込むからね」

「わかったわ…」

仙人ＮＰＣの顔が何だか嬉しそうに見えるが、それもそうか。彼は今でこそ≪体術スキル≫の伝道師だが、この封印をしてからは、ひたすら岩の上で独り、座っていただけなのだから。

「今そこから解放してやるよっと…いっせいのせっ！」

「ふっ！」

ベコッ！　岩に穴が空いたら、おそらくこんな音がするのであろう効果音を発生させて綺麗なエフェクトと共に岩はチリとなった。その岩の下にあったのは…

「階段だ…おそらくこの下が神殿だ、シノン」

「気を引き締めて行きましょう」

そこで老師からクエスト案内が

『ほっほ、ようやく勇者が現れおったか…ここを解放したとあっては、この先に住む魔物を必ずや退治しておくれ』

「「はいっ」」

そして、俺たち二人は神殿の中へ進んでいくのであった

2層～攻略・後～

この第二層テーマは〝牛〟がメインとなっている。シノンが好きな≪トレンブル・ショートケーキ≫が存在するのも、リアルともさして変わらない容姿を持つ牛型モンスターがいるゆえである。〝牛〟と言えばいろんな伝説・神話に登場するものだ。例えば、牛鬼。日本各地で人間に恐れられたり、奉られたり、土地になったりと忙しい伝承をもつ。

この前シノンにも言ったが、ＲＰＧのストーリー構成として伝承を取り込むことはそう珍しくない。なので、たとえＶＲＭＭＯＲＰＧの知識が少なくても、このゲームには伝承・伝説をリアルに近い感覚で体験できるという、違った楽しみもある。そう、雑誌には書いてあった。βの配信が終わってから、少し神話とかに興味を持ち始め、いろいろ図書館で本を読むようになったのは、我ながら影響されすぎたと思っている。

なぜこんな話を始めたのかというと、絶賛クエスト進行中故に「この物語はオリジナルなのか、原典があるのか」と考えていたからだ。隣を歩く相棒は「このストーリーには既視感がある」と語ってくれたので、原典がある前提で考えているのだが…。

……この七人の〝ヒト型〟お供え物って、完全に生贄だよな?と考えずにはいられな

い…。

▽

「なんなのよ…これ」

「「ブモォオオオ!!」」

ドドドドドドッと、音を立てて目の前を通過していく≪トーラス≫型モンスター3体の群れ。俺たちは≪隠蔽≫スキルで隠れながら少しずつ奥へと入っていく。

この迷宮はとにかく道幅が狭い、そしてクネクネしていて入っていくことよりも、出ていく者を拒んでいるかのような設計をしている。おそらく、老師が入口で教えてくれたように、奥に眠るモンスターを外に逃がさないための設計なのだろうが…。

「流石に三体は同時に相手できないな…。≪ナミング・インパクト≫は範囲技だし、ここで三体同時に放たれたら、それこそ逃げることもできなくなる」

(まずったな…このクエスト自体、大規模パーティーを前提としたクエストだったのかもしれない…)

「なら、各個撃破ね」

「…まったく、冷静すぎだろシノン」

なんとも涼しい顔で提案してくる相棒殿。俺も「各個撃破」っていうフレーズ使ってみたかった。男の密かな憧れっていうやつだ。

「このくらいじゃ〝絶望〟の範疇にも入らないってことよ」

「……」

なんとも含みのある言い方だ。まるで本当の〝絶望〟の味を知っているかのような…。

（いや、今は考えないようにしよう。まずは各個撃破、どうするか）

考えをシフト変更させて今の状況を確認。まあ、やることは決まっているし方法も頭には浮かんでいる。どうやらこの迷宮にうろついている大型Ｍｏｂはあの三体のみ。今でこそ固まって動き回っているが、歩行パターンが異なっている可能性は大いにある。先に一匹に別れたやつから

「アキ、一匹だけ違う道に入っていったわ。追いましょう」

「さすが、俺が言おうとしてたことを先に…。ふっ、こんなに立派に成長して」ホロリ

「私の親みたいに言わないでよ…まったく。付き合ってられないわ、置いていくわよ」

態度も立派になりましたね、まる

▽

一層に閉じ込められていた時間は約一か月と少し。この二層をクリアするのにかけようとしている時間は一週間と残り3時間（おそらくクリアできると思う）。死人なしでクリアするのは大前提だが、第一層フロアボスモンスター≪イルファング・ザ・コボルドロード≫はβとは違うパラメータを示してきた。であれば二層も当然β時代と何らかの変化があるものと考えられるのだが。

俺はこのゲームは良くも悪くも公平性が保たれていると思っている。なぜならば、努力した分だけレベルという形で現れるし、Ｍｏｂもあり得ない程の軍隊を率いて、祭り上げられることなどは絶対無かったからだ。これはβの時も同じで、本気でこの世界に閉じ込めておきたいならば、極論１００層クリアで脱出できなくすればいい。１層に高レベルＭｏｂを配置すればいい。しかし、茅場はそうはしなかった。俺たちにゲーム攻略という〝餌〟でこの公平にできている世界を馴染ませようとしている。

ならば…この〝公平性〟がみられるこの正規版ＳＡＯの世界でβ時代にはなかったボスのパラメータを急に組み入れるようなことをするのか？情報を得られる可能性くらい残しているんじゃないか？もし、このダンジョンの先に何もなかったとしたら、ボスに関する情報は偵察でしか得られなくなる。そんな理不尽が起きようものなら（そもそも閉じ込められた時点で理不尽だが）この世界に抱いていた主観が揺らいで…。

「…ほんと、分からないよな…」
「ええ、そうね。私も分からないわ。……大型Ｍｏｂと戦っている最中に、そんなこと考えていられるあんたの頭がね！」
　絶賛≪トーラス族≫系Ｍｏｂとの戦闘中に考えていました。考え出したらキリがないことだが、ゲームクリエイターとして〝世界観〟を壊すことは茅場ですら避けたいことなのではないか？と考えてしまった。おそらく、答えは本人に聞くしかない。ま、聞いたところで迷惑な話に変わりないのだが。
「集中しなさい！もうフロアボス攻略戦まで3時間切ったわよ！」
「ごめんごめん。じゃあ、こっから本気出そうっかな～」ウデブンブン
「うざ」
「(^ ―^)」
　今日もシノンの毒舌ぶりは冴えている。こうもシノンは毒を吐きながら、俺は少々ユーモアを醸しながら戦っているのだが、連携はバッチリ。証拠に三匹いた≪トーラス≫もあと残すは一匹だ（もちろん一匹ずつ狩っていった）。
「一昨日の最速記録を更新するか、≪トーラス≫狩りの」
「そうね、一日ぶりの相手だから心配だったけど、私もここからは本気を出せそうだわ」
「いや、それ俺と被ってるって」

最早、二人にとって二層の小ボス≪トーラス≫はそこらにいる牛と変わらない感覚なのだ。ただ牛が二足歩行になり筋肉ムキムキになった、ただのモブ。そんなモブ相手に二人の本気（自称）が発揮されたとあっては向こうからしたら、ひとたまりもない。今回も二人の記録更新のために付き合わされる可哀想な、お牛さんたちなのであった。

▽

「なんなのよ…これ」（本日二回目）

まあ、ＲＰＧにはよく発生するイベントだ。みんなも経験したことのある展開、それは

「まあ、行き止まりイベントって奴だな」

そう、この狭いダンジョンで俺たちの眼前に繰り広げられている光景は、大量の牛型Ｍｏｂが行く手を阻んでいる光景だ。

「なに?イベントなの、これ。ってことは時間もないのに、これから何かを達成しないといけないってこと?」

「う〜ん。まあ俺の知っているイベといえば、笛吹いて道塞いでる奴を起こしたり、頭痛に悩まされている奴らを秘伝の薬で解決したりって言う…」

「分かった。分かったから、もう何も言わないで。あなたの知識が有名ＲＰＧに偏っているのはよく分かったわ」
「それが分かるっていうことはシノンも結構やってますな？」
「うっ、…いいじゃない。女の子がやってても」
「悪いだなんて言ってないよ。ただシノンのことが知れて嬉し…ツデ！」ヒジッ
「バカなこと言ってないで、早く解決策を教えなさい。アキがそうやって冗談言ってる内は大抵どうすればいいのかなんて、分かってる時なんだから」
「さすが！お見通しか。…ま、冗談言うのは時間を気にしすぎて、焦ってほしくないっていう意味もあるんだけど…。それは一旦置いといて、気づいているか？シノン」
「もちろん。この先にはフィールドボス級のＭｏｂがいるわね。なんとなく、分かるわ」
「そもそも、これは難易度的に≪トーラス≫が三体同時にポップしてる当たり、中型くらいの大きいパーティー専用のクエストなんだと俺は思う。そんなクエストの先に待つボスがどんなに強いのかは、正直見当もつかない」
「確かに…二人じゃ荷が重い…かしら？」
「だから約束してくれ。俺が逃げろと言ったら迷いなく、逃げる。俺も後を追うから振り向かず、逃げ回ってくれ。いいな？」
「……分かったわ。これもチームプレイってことね」

「ありがとう。…じゃあ、行くか」
「ってだから、このＭｏｂのギュウギュウ詰めの中をどうやって向こうまで行くのよ！」
「牛だけにな」
「殺すわよ？」
「おわ（汗）！何の飾りもない純粋な殺意が一番怖い！」
「い・い・か・ら！早くしなさい！時間がないのよ！」
「分かったよぅ～…えーおほん！壁を走ります！」
「……」チャキッ
「待て待て待て待てっ！マジマジ！大マジだから！だから短剣抜かないで！スキルに≪ウォール・ラン≫ってあるんだって！」
「そんなの私取ってないわよ」
「いや、これは体術スキルに組み込まれているスキルなんだ。ＡＧＩに結構割いている俺たちなら、システム的に結構な距離を走れるはずだ」
「…まぁ、そこまで言うなら…信じてあげてもいいけど…。嘘だったら、承知しないからね！」
「ははは、大丈夫。ちゃんと実演するからさ。シノンもすぐにできるさ」
細くて狭い道に、牛どもは５メートルくらいを占領して押し寿司状態だ。天井は高

い、おそらく体術スキルを使用するための布石だと思うが、これが普通のＲＰＧだったら違う方法を試してみたいものだ。たぶん、道が広くなったり、壁が油を引いたみたいに滑りやすくなったり…でも、先ほども言ったみたいに時間もないので余計なことはしないでおこう。戦いも今は避けたいところだ。

そんなことを考えながら、俺は≪ウォール・ラン≫敢行のために助走を取る。そして、地面に足の形がめり込む程のスターダッシュを決めて…

「おおおっし！」

勢いよく走り幅跳びだ。ただし、向かう先に設定するのは牛どもの頭上側面に位置する壁。リアルならば壁に足を付けたあたりで重力が働き、そのまま垂直落下だが、俺の体は未だ落ちる気配はない。どころか、そのまま平行移動を始める。

ダダダッという騒音をダンジョン内に発生させて牛たちの上を、壁走りで追い抜いて…重力を感じ始めたあたりで華麗にジャンプを決めるのであった。距離にして7メートル弱ぐらいだろうか、シノンの目の前で失敗しなくてよかった。

「という感じだ！」

「ごめん。何も理解できなかったわ」

「大丈夫！シノンはセンスあるから絶対できるさ！」

「あんた…自分の言葉が持つ薄っぺらさが尋常じゃないわよ…」

「そんな～…難しいことじゃないのに…。心配ならちょっと後ろの方で練習してみなよ」

「そうするわ」

シノンは立っている通路の右角に入っていた。そこで練習を始めるようだ。

～10秒後～

シノンがすっと角から出てきた。速すぎやしないだろうか？

「あ、そういえばアドバイスはね。そうだな～…昔、水面の上を走るために〝右足が沈む前に左足を出す〟っていうのやらなかったか？イメージはそんな…」ダダダッ

「ホントだ、意外と簡単ね」

ウィンクを飛ばして、そんなことを言うのはシノンさん。何が俺を絶句させたかと言うと、走行距離が俺よりも2メートルほど多いことだ。

「…人の話は最後まで聞いてよ…（泣）」

流石シノンさん、マジパないっす。あとで俺にもコツ教えてね☆…強がってみたものの、やっぱりちょっと悔しいアキ君なのであった。

▽

「この大扉の向こうがこのダンジョンにいる魔物…フィールドボスのエリアだろうな」
「ええ、ここにいるだけでも緊張が伝わってくる感じ…、一層でも感じたわ」
「シノンさっきも言ったけど、俺が」
「『逃げろって言ったら』逃げればいいんでしょ?分かってるわ。現状、まだあんたの方が強いしね」
「うん、ありがと。まあシノンも少ししたら俺なんかあっという間に抜いていくだろうけどな」
「お世辞は要らないわよ」
「じゃあ、開けるか…。……??」
「なに?どうしたのよ」
「扉があかない…。そんな馬鹿な、この扉に関する条件なら突破してるはず…」
「そうよ…お供えの人形はちゃんと私のストレージにしまってあるんだし、ちょっとどいて?」
　ここまで来てクエストのやり直しは辛すぎる。そして時間もやり直しの効かないところまで来ている。もし何かを見落としているのであれば、速攻クエストクリアは諦めてフロアボス討伐に加わるべきなのだが…
「?なによ、簡単に開くじゃない」

シノンが扉を開けることによってクエスト破棄は免れた。
「俺じゃ開かないって…なんだ?ストレージに保管している奴じゃないと開かないってことなのか?」
「さあ?でも、結局は開いたんだし、いいじゃない。さっさとフィールドボスを倒して討伐戦に参加するわよ」
そう言ってシノンは足早に扉の奥に入っていく。俺もそのあとに続いて、ボスフロアへと足を踏み入れようとした途端
物凄い速さ、ともに音を立てて扉が閉まった。その扉の衝撃に巻き込まれ、俺の体も数メートル後方に吹き飛ばされる。
「うわっ!」
「アキ!?大丈夫!?」
扉越しにに聞こえるシノンの声。声色からも読み取れる、俺を心配してくれている気持ち、だが
「シノン、気を抜くな!そっちはボス部屋なんだぞ!俺は大丈夫だ!」
「分かってるわよ!…だめ、こっちから扉は開かないわ」
「ちっ、なんだよこのクエスト!仕掛けが多すぎる。シノン、ボスは出てきたか!?」
「ええ、今ちょうど現れたわ…名前は≪レイジ・ザ・ライトニングトーラス≫、名前から

して…」

「〝麻痺攻撃〟持ちか…っ。シノン！今どうにかして扉を開けるから無茶はせずに、見たことのない攻撃パターンが来たら下がるんだ！」

ソロで最も忌避すべきことは〝麻痺〟だ。おそらくダンジョン内で麻痺に陥った者の生還率は０％と言っても過言ではない。ましてやボス戦でずっとタゲを取っているのだから、麻痺＝死と言っても過言ではない。

「畜生！俺が人形を持っていたなら…」

扉の向こうから戦いのＳＥが聞こえてくる。おそらく、≪トーラス族≫特有の≪ナミング・インパクト≫だ。俺のＨＰの下に表示されているシノンのＨＰバーは、まだ減少していない。早く…早く解決法を探さないと…っ。

▽

「ふっ！」

どうやらフィールドボスである、このデカブツも他の≪トーラス≫と変わらない攻撃パターンを持っているようだ。そこは私にアドバンテージがあると言える。でも、アキがいないことによる、戦力の低下、そして彼には遠く及ばない判断力がないのは心許な

い。

距離は十分とり、≪ナミング≫に最大限気を付けている。徐々にではあるが相手のHPを削り、4段あるうちの1段目を削り切ったとたん、ボスは大きくのけ反り一瞬そこで止まる。身に覚えのない判定に足を止めてしまった。そこで自分の愚かさを呪う。

(まずった!…これは私の知らない攻撃!)

▽

「持ってる奴しか入れないなら、また集める以外にないのか?いや、でもパーティーで受けていることはシステム的に認知されているはずだし、なにより俺たち二人に6体の人形を託されたんだ。だとすれば…」

そこで、扉の向こうで戦っているシノンのHPが減少しているのが見えた。しかも

「〝麻痺〟!?シノン、大丈夫か!」

「ごめんなさい…しくじったわ…こいつブレス攻撃を持ってる。距離はあるけど、多分もう…。クエストと討伐戦はアンタに任せ」

「あきらめんな!まだ、終わってない!解毒ポーションをちょっとずつでいい、丁寧に焦らず取り出して飲むんだ!」

シノンの弱気な声が聞こえる。その弱さが俺に伝染しそうになるが堪えてシノンを奮起させる。しかし

「でも…ごめんなさい。怖くて…手が動かないのよ。私また弱く…」

「シノンは弱くない！お前は一層で俺が倒すのを諦めたボスを倒そうとした！お前は皆に嫌われようとも俺に味方してくれた！お前がいなかったら俺は何も…っ！」

俺の悪いところは感情が高ぶると涙が出てしまうことだ。そんなの生きてきて嫌というほど経験してきた。俺の今を形成している記憶には、何もかもを諦めたこと、何もかもから逃げたことが積み重なってできている。俺は元々無力で無気力でそしてバカだった。

それでも、そんな俺でも誇れることがたった一つだけある。俺は〝後悔だけはしない〟やらなきゃよかったと思ったことだけは一度だってない。どんなに立ち上がれない間違いを犯しても、誰かにバカにされて泣くことがあっても〝これ〟だけは譲れない。

今ここでシノンを諦めれば俺は一生後悔する。それだけはしたくない。考えろ、全神経を集中させろ。人形、七つ、クエスト破棄、そして俺たち二人。

そういえば、俺たちは以前話したことがあった。〝人型〟人形は6つしか手に入らないと、そして残されたカギは〝俺たちというヒト型〟であること。だから、シノンが部屋に入れたことで、クエスト進行には〝ヒト型のオブジェクト〟が7つ必要（人形6つ

&シノン）であることは分かった。という事は、クエスト進行に必要なシステム的到達点は、ボス部屋に7つの〝ヒト型オブジェクトがある〟というのが条件なのではないか？

なら、シノンが今持っている人形を壊せば…クエスト破棄、あるいはこの扉が開いて俺を〝ヒト型オブジェクト〟として招き入れるのでは。

「シノン！人形だ！人形を一つ破壊してくれ！」

「…え、人形を？」

「ああ、頼む。どうせ死ぬことを覚悟したのなら、最後まで足掻け！そして後悔しない道を見つけろ！」

正直、ホントは死ぬことの覚悟より生きる覚悟を持って欲しいのだが、弱気になっている相手を真正面から否定しては、ポジティブとネガティブのぶつかり合いになって行動を遅らせてしまう。ここは我慢してシノンの行動を導く。

「…わかった、から。最後まで頑張るから、まって」

無慈悲に、ボスの足音がシノンに近づいていくような音が聞こえる。内心穏やかではないどころか嵐が巻き起こっているほど焦っている心を落ち着かせて…ボスをすぐにでも迎撃する準備を整える。

ゆっくり、集中を研ぎ澄ませるように、ボスの足音が聞こえる方に体の向きを変え、剣

を担ぐようにして構える。威力はないが突進系ソースキル≪レイジスパイク≫だ。
「シノン…がんばれっ」

▽

アキの目的は分からないけど、これが今までの、私たちの攻略を無にしない事であるのなら…これでアキのこれからの攻略に役立つことが出来て、何かお返しが出来るのなら
「それでいい…たったこれだけよ。動け！」
体がスムーズに動かない、でも少しずつなら動く。ボスは幸い歩いて恐怖感を煽るようにこちらに近づいてくる。それでも、私にはやらないといけないことがある。アキのためにしてあげられることがある。ただの電気信号が与えてくる音の恐怖感なんて、怖くない！
ウィンドウを開けることに成功。道具をスライドさせていく、途中解毒ポーションが目に入るが、そんなものは要らない。今は何としてもアキに…。
ストレージの最後の方に大事にとっておいた人形が見つかる。ボスは私の目の前で止まる。人形をオブジェクト化に成功する。ボスは不敵な目をこちらに向ける。私は

人形に短剣を、ボスはハンマーを振り被る。そして、人形に刃を突き立てたことで、元から0に近い耐久値は消え失せ、エフェクトとなって四散する。

「やった…」

しかし、時はすでに遅く。≪トーラス≫はその長大なハンマーを振り下ろしている。私は運命に立ち向かうことが出来たかな?

▽

扉が開くのを今か今かと待ち望み、そしてその時はやってきた。どうやら考えは間違っていなかったという思考は、状況を見て頭から消え去った。シノンに死がすぐそこまで迫ってきている。≪レイジスパイク≫でも届くか分からない位置にシノンは倒れていて、その目の前には巨大な≪トーラス≫がハンマーを振り被っている。最早何かを考えている場合ではない。

「てめぇええ!!」

何も考えられない。こんなにも無計画で飛び込んでいったのは初めてだ。≪レイジスパイク≫を放つも、おそらく敵前手前で止まる。そもそも、走ったところであのハンマーは止まらない。ならば、即時、可能性のある方を選び取った結果が≪レイジスパイ

ク≫だ。
　敵への突進力が落ちていくのが感じられる。スピードも距離も威力も何もかもが足りないのが分かる。俺はホントに中途半端なやつだ。でも
『諦めんな！』さっき言った彼女への言葉を今になって思い出す。そう言っておいて、先に諦めかけているのは俺の方ではないか？俺の誇りは何だ？俺はここで諦めて良いのか？
　〝後悔しないのか？〟
「しないわけッ…ねえだろうがッ!!」
　諦めかけていた心に灯がともる。刹那、俺の消えかけていたソードスキルのライトエフェクトが一層輝きだした。かと思えば、≪レイジスパイク≫は再び威力を取り戻し。いや、それ以上の力を見せて≪トーラス≫への突進を始めた。
「届けぇえええ！」
　狙うのは≪トーラス≫の体ではなく、その無骨にして長大なハンマーだ。まさに渾身の一撃ともいえる突進はそのハンマーの中心を捉えた。そして
　ギャリィイイン！
　金属同士の不快な音が響き渡る。シノンに降りかかっていた死そのものを吹き飛ばしてやった、どころかハンマーを横殴り的にソードスキルをぶつけたことで、そのハン

マーをブラストしてやった。
　技後硬直は相手が怯んでいる間にとけ、≪トーラス≫の腹中心に、体を精一杯ひねり威力をブーストさせた水平切り≪ホリゾンタル≫で吹っ飛ばした。
「シノン！大丈夫か!?」
　シノンの頭を抱え、後ろのポーチに用意していた解毒ポーションを飲ませる。
「シノン、シノンっ…死ななくて良かったっ」
　本当にダメだ、涙が止まらない。そんな俺の顔にシノンがいまだ痺れている手を添える。
「…うそ、うそみたい。本当に来てくれたんだ…本当にアキなんだ」
「ああ、オレだよ。諦めなくて本当に良かった」
　添えられた手を握り返し、シノンの体温を確かめる。心なしか力のないシノンの顔にも涙が見える。
「…信じられない。私、もう駄目だと思って、でもいつもアキに助けられて、何か最後だけでもお返しが出来たらって…」
「お返しなんていらない、役に立たなかったことなんて一回もなかったじゃないか」
「…でも」
「でもじゃない。もし何かを返したいなら生きて、もっと楽しいことで返してくれ。俺

は…俺はシノンに死なれたら嫌だ！だから助けるんだ！これまでも、これからも！」

身勝手な我儘を言っている間にシノンの麻痺状態が解ける。回復ポーションを渡して、こちらに向かってくる≪レイジ・ザ・ライトニングトーラス≫に体を向けて剣を構える。

「このクエストを攻略するのは辞めよう。二人とも体力があって、動けるうちにとっとと、人形を壊して…」

「いいえ、その必要はないわ」

シノンは立ち上がりながら、そしていつもの不敵で輝くような笑みを浮かべて言う。

「私、さっきまではあんなだったけど本当は諦めたり〝後悔〟するのは嫌いなの。だから、あいつは…私をこんなにしたあいつを倒して、私は強くなる」

「でも…」

さっきまで死の淵に立っていた者が、心の整理もなしに戦えるわけがない、と思う。シノンの手はわずかながらに震えているようにも見える。やはりここは…

「それに、今は〝相棒〟のアンタもいてくれる。この世界で一番頼りになる私のパートナー。あなたがいてくれさえすれば、私は強くいられる。…だから力を貸して、アキ」

ああ、この目は…いつか見た一層ボス戦の時の目だ。あの時と変わらない決意の目。俺はあの目に当てられたからこそ、この少女と一緒に戦おうと思えたのだ。

「ああ、後れを取るなよ〝相棒〟！」
「そっちこそ！」
このときシノンとの絆が深まったと本気で感じられた。

▽

「スイッチ！」
「了解！はぁあああ！」
≪レイジ・ザ・ライトニングトーラス≫。名前からして今までの≪トーラス族≫と全く違うのかと思えば、そういうわけではなかった。シノンに聞いた情報〝麻痺ブレス〟は必ず固有モーションがあるし、範囲もそう広くない。確実に避け、確実に攻撃を当てていけば、二人でも十分にやっていける。
シノンの≪ファッド・エッジ≫が決まると数ドット残してボスが〝スタン〟した。
「今だ！総攻撃チャンス！」
「いくわよ！」
俺とシノンのフルアタックは全てクリティカルヒットを記録した。そしてどちらと

もいえない攻撃が当たった瞬間。汚いエフェクトを爆散させて≪レイジ・ザ・ライトニングトーラス≫を見事討伐したのであった。目の前にはもちろんＬＡボーナスウィンドウが。

「ふう、終わってみれば…あっけないものね」

「だな」

（……アぁあああ！またやらかした！またシノンの前で泣いてしまった！）

頭を抱えて、二層に続く階段以来の羞恥に震えるが、隣にも同じ挙動をしている者が一人。

「シノンさん？どうしｔ「忘れなさい！」はい？」

「さっきの私の世迷言は忘れなさい！って言ってるの！」

顔を真っ赤に抗議してくるシノンはそれはもう、可愛かった。耳まで赤くするとはまさにこのこと。この時俺はシノンの弱みを握れたこと、そしてフィールドボスを倒した安心感で若干、気が舞い上がっていた。

「ええ？でも、あれくらいの方が可愛げあるゼ？」

「…弱みを握ったのはアンタだけじゃないのよ？…残念ね、明日にはアインクラッド中にアンタが泣き虫で変態だっていう噂が浸透するわ」

「スミマセンデシタ」ダイナミック　ドゲサ

「フン！」

シノンとアルゴの親密度は侮れない。いつの間にか情報のやり取りを頻繁にやっているようだが、その中には俺の秘密のあれやこれやの情報も、まさか？

「それはないから安心して、たかがあんた如きの情報なんて買う人もいないだろうしね。この１０コル人間アキ」

「ぐはぁ！」

そう、俺の身辺に関わる全情報は情報屋の間で１０コルで取引されているのだ！投擲武器すら買えん…。

「で？ＬＡはなんだったの？私には表示されなかったから、どうせアンタが取っていったんでしょう？」

「あ、そうだった！シノン、ウィンドウ出してくれ」ピピッ

「？」

「実はね、さっきドロップしたのは短剣なんだ。はいこれ≪バンディット・オブ・フェイト≫意味は…」

「≪運命の盗賊≫ってところかしら」

「いや、そこは≪運命を掴み盗る者≫でいいんじゃないかな…。でも、モンスタードロップでそこそこ高難易度のクエストだから性能はお墨付きだよ。きっと、シノンを守って

くれる」
「あら、アンタは私のことを守ってくれないの？」
「もちろん、守るさ。さっき約束したしな」
「…っ。真面目に返さないでよ。恥ずかしいじゃない」
「実はそれが狙いだったり」
「だとしたら、この短剣の『低確率で麻痺状態にする』っていう効果がアンタに牙をむくわよ？」
「ナンデモナイヨ～」
「まったく……でも、まあ。ありがとう、大切にするわ」
　久々にシノンのツンとデレがさく裂した。目の前が眩しすぎて目を合わせることすら困難だが…。
「そうだ！二層攻略のカギ！」
「そういうのって、どうやったら分かるのかしら？」
「まあ、だいたい壁画パターンか口伝パターンだな」
「壁画ねぇ～…あっ、あれじゃない？玉座の後ろの壁画」
　そこには二層のフロアボス≪バラン・ザ・ジェネラルトーラス≫通称バラン将軍らしき巨大なＭｏｂの壁画が、おそらく取り巻きにいるＭｏｂ一匹は≪ナト大佐≫で違いな

い。しかし、その中央には細長く、でも≪トーラス族≫特有の角を持ち、たたずむ一際大きいＭｏｂの絵が…。

「まずいな…今回もやっぱりβと違うかもしれないっ」

「本当に？どこら辺が」

「この中央にいるＭｏｂ。間違いなくβ時代にはいなかった。きっと…ああそうか君主（ロード）の次が将軍（ジェネラル）なわけないよな」

「何勝手に納得してるのよ。ちゃんと分かるように説明してちょうだい」

「時間が惜しい。あと、二時間くらいだよな？ここからだとボス部屋まで少し間に合わない。移動しながら説明する」

「…分かった」

▽

「って出口見つからないじゃない！」

「ああ、本当に最悪だ。せっかく道標にと置いていた、木の枝も耐久値が切れたのか全部無くなってやがる」

絶賛迷子中。うねうね曲がっているこのダンジョンは正に迷宮。入った者は永久に

出ることは叶わないのであった…。という理不尽展開はないはずなので何とかして手掛かりを探す。

「このまま、下手に動くと深みにハマるな…。ったく、中型ボスも倒したっていうのに！このままじゃ本当に間に合わなく…」

「私、思い出したわこの原典。これギリシア神話のミノタウロスのお話よ…。差し詰めここはミノタウロスが閉じ込められた迷宮（ラビュリントス）、そして、私たちは勇者セテウスってとこかしら」

「あ～そんな話もあったな～。で、急にそんな話持ち出してどうしたんだ？何かいい案思いついたとか？」

「ええ、原典の続きは覚えてる？勇者セテウスはミノタウロスを倒すんだけど迷宮を出られなかったの。当然よね、ミノを封印するための迷宮なんだから。簡単に出口が見つかるはずなんかなかったんだわ」

「え、もしかしてその勇者って迷宮内で死ん…」

「いいえ、最後にはアリアドネ―の毛玉が彼を助けたのよ」

「毛玉って…それもしかして」

シノンはおもむろにストレージから、毛玉を取り出した。数時間前に少女から貰った毛玉だ。すると毛玉はピカッと発光したかと思えば、先端がまるで意思を持った蛇のよ

うに動き出し迷宮内を進み始めた。
「どう、分かった？」
「ああ、さっきの幼女に感謝だな！」
「私に感謝しなさいよ！」
ひとまず迷宮内で一生を過ごさなくてもよくなりそうだ。良かった～

▽

出口を出るとそこには仙人様とクエストＮＰＣが立っていた。
『ほっほ。どうやら、奥に潜む魔物は討伐してくれたようじゃな。礼を言うぞ』
『あの、ありがとうございます。これ、私が作ったものなんですが受け取ってください』
そこでクエスト報酬タイム。今回の報酬はトーラスの毛で編み込んだマフラーだ。
うむ、これもシノンに似合いそうだな。
『勇者様たちはこれから≪天柱の塔≫に挑まれるのですよね？でしたら、気を付けてください。あそこには全≪トーラス族≫の王がいると聞きます。その王が使う吐息には人を麻痺させるとか』
今回の報酬は、麻痺耐性を上げるマフラー、バラン将軍の上にはさらに上がいるとい

う情報だ。報酬にしては大きすぎるくらいだ。そこでクエストクリアの画面が表示されたので、その場を後にする。その前に
「シノン、こっち向いて目つむって」
「!?あ、あんた!私の体に何するつもりよ!」
「何もしねぇよ!いや、何かはするけど、いかがわしいことは絶対」
「変態の名が浸透…」
「分かったよぅ～。目つむら無くてもいいから、こっち向いて、お願いします」
「ん」
　なんだよ結局目つむるのかよ!と言うのは、またひと悶着起きそうなので言わない。そして、シノンの首元のネックウォーマーを解除してもらい、首元にマフラーを巻いてあげる。
「うん、似合う!」
「いいの?私が貰っちゃって…結構性能良い気がするけど」
「いいんだよ、シノンがもし俺よりも強くなったら俺はハッピーだしシノンもハッピーだろ?だから、いつでもいい…いつかは俺のことを助けてくれよ」
「ええ、約束するわ。私、アンタを守れるくらい強くなって見せる。それまでくたばんじゃないわよ?」

「おう！」
「ところで、時間は…？」
「11時っすね」
「「……これはやばいね（わね）」」
大遅刻の予感っ！

▽

大遅刻になりそうだが、作戦は怠ることはできない。まず、先ほどの少女からの情報を纏める。
「真のフロアボスはトーラスの王。そして、モーションに目が光ると広範囲麻痺ブレスを使う、ここはさっきのでタイミングはつかめたな？」
「ええ、でも心配だから一応声をかけてくれると助かるわ」
「分かった。そして、ここからはあまり参考にならない話だが、トーラス王は〝額の王冠を投擲武器で攻撃すればディレイできる〟ってことも忘れるなよ」
「まあ、≪投擲≫スキルは上げてないし、やっぱり避けるしか」
「できないな、おそらく討伐隊にも上げている奴はいないだろう」

空中で打てるソードスキル例えば≪ソニックリープ≫ならば当てられるかもしれないが、タイミングが難しい上にリスクが大きすぎるので断念だ。
「これで以上だ！とにかく先を急ごう！」
「そうね……」グゥ
「……」
「…／／／」
「…くふっ」
「笑わないでよ！今日は朝から何も食べてないし、生死をさまようし、疲れたのよ！」パンチ
「分かってる、分かってるから殴らないで（笑）」
「…だから、さっさとさっき買っていた饅頭をよこしなさい」
「えっ!!いや～これは非常食にとって置こうかな～と…鋭いな、シノン」
「当たり前、ポーションを買うふりして抜け目ないんだから」
ズイっと俺の目の前に差し出されるシノンの手。先ほど買ったのは≪タラン≫で買った≪タラン饅頭≫だ。バレては仕方ないので二個の内一個をその手に乗っける。
「これ中身は何？」
「実は分からないんだ。名物らしいけどβ時代にはなかったし…。まあ、〝牛〟にちな

んでいるんだし牛肉かな?」
「そう…いただきます。はむっ…んむっ!?」
「あ〜ん、ってどした?」
シノンが一足早く噛みついたのだが、なんだか様子が変だ。なにか食べきれないのか、ずっとムグムグしている。
「ぷあっ!っにゃあ!」
「NYA??ってシノンさん!?」
シノンの顔には白濁の液が…決して卑猥なものではなく、その正体は≪タラン饅頭≫の中身。おそらくこれはカスタードクリームだ。しかし、これは…ひどい(何がとは言わないが)
「許すまじ…タラン饅頭…で、お味は?シノン」
「本気で今それ聞いてるなら、このタラン饅頭がアンタに火を噴くわよ?」
直訳:タラン饅頭ぶっかけたろか?ということを即座に理解し、全力で首を横にブンブン振るが、シノンは目を閉じているせいで見えていない。
「ん!」
「え、なに?」
「ん〜!!」

シノンが唐突に顔を突き出してくる。え、これは何をすればいいんだ?キスか?…冗談はさておき、顔を手持ちのハンカチで拭ってやると綺麗さっぱり落ちた。これはＶＲならではだ。

「決めた…やっぱり私いつになってもいいから料理スキルを上げるわ。もう変なものを食べるのはコリゴリよ」

「そうか…そいつは楽しみだなぁ」

「誰も、アンタの分も作るなんて言ってないわよ?」

「そんな～、相棒だろぉ?」

「そこで、相棒を引き合いに出さないでよ…。ま、味見くらいならさせてあげてもいいかもね」

「ありがとうさん」

迷宮区まであと１０分。現在時刻は１２時ちょっきし。おそらく、３０分くらいの出遅れになりそうだ。

▽

鬼神のごとく迷宮区を踏破していく俺とシノン。レベルはともに１４。たぶん、攻略

組でもトップを取れる数字だ。まあ、今日まで一日も休みなしで戦ってきたのだから当然ではあるが。

「「おぉおおお！」」

にしても男女二人が並んでいるには些か相応しくない雄たけびを上げている。きっと、気の利いた男であればダジャレではなくシャレたことを一つや二つ言えるのだろうが…。今の猪突猛進二人組の頭の中にあるのはただ一つ。

（こんなに苦労して手に入れたクエ情報を無駄にできない！）

まったくもって日本人の〝もったいない文化〟は素晴らしい。ここまで、人が変貌するのだから…。

そんな二人の前に一人のプレイヤーが目に入る。彼が持つその武器は――。

「貴方も攻略に参加するのね？なら急ぎましょう。ネトゲのレイド戦って時間にはシビアなんだから」

新たな仲間を一人、味方につけていざ攻略部屋へ。その途中、暫定的新メンバーを置いてけぼりに（おそらくステータスの問題）してしまったのは内緒だ。

▽

「ここかっ！」
「ねえ、〝彼〟一人においてきちゃったけど大丈夫かしら？」
「大丈夫だろ、一人で迷宮区に入るくらいだし。戦闘も申し分なかった。『先に行って下さい』とも言ってくれたし」
「あれは、貴重な戦力になりそうね」
「ああ。それよりも準備はいいか？入るぞ、〝相棒〟」
「今回もよろしくね〝相棒〟」
拳をコツンと合わせていざボス部屋に入る…と、そこには一際大きい≪トーラス≫が！俺とシノンがその光景を見て思ったのは間違いなく
（（あちゃー間に合わなかったかー！））
だろう。しかし、考えはそこで切り替えて、いかに今がまずい状況かを把握した。正規仕様ＳＡＯ二層ボス≪アステリオス・ザ・トーラスキング≫はその巨躯を活かした攻撃と≪ナミング≫でレイド中心人物、リンド、キバオウそしてキリトとアスナを麻痺状態にしているではないか！
「このっ！シノン、行くぞ！ブレスを吐いた後の技後硬直はボスも屈む必要があるみたいだ！」
「それなら、額の王冠を」

「「叩ける！」」

それが、今だ。ＡＧＩ振りに力を注いでいる俺たちならきっと届く。かがむ≪アステリオス・ザ・トーラスキング≫の足から登っていき、頭の頂点を捉えた！俺は≪バーチカル≫、シノンは体術スキルの≪弦月≫詳細はサマーソルトキックだ。

「ブゥウモオオオオ！」

耳にうるさい奇声を発して、キングはディレイする。

「悪い、遅れた！大丈夫…じゃないよな…お二人さん。て、心配するだけ損か／／／」

「ちょっと、やめてよね。もう少し緊張感持ちなさい。二人とも／／／」

なぜ、俺たちが照れたのか…それはキリアス（※キリトとアスナ）が白昼堂々、主にキリトが覆いかぶさるような態勢で抱き合っていたからである。攻略中だというのに…いったい何を攻略していたんだか、この二人は（言わせんなよ！）。

「「ちがう！」」

「俺はアスナを助けようとして！」

「私のせいだって言うの!?あなたが勝手に飛び出してきたんじゃない！」

「ええ!?助けてもらったのにその言い草って」

「貴方も麻痺してたらそれは〝助けた〟とは言いません！〝巻き添え食らった〟って言うんです！」

「うぐぅ！じゃあさっきの微笑みは何だよ！あれは……なんだったんだ？」
「／／／し、知らないわよ！そんな適当なこと言わないで！」
体は麻痺しているはずなのに、口はよく動く。やっぱり
「仲いいな（わね）二人とも」
「良くない！」
ひとまず、麻痺が解けるまでシノンと時間を稼ぐことになった。キリトとアスナはエギルさんに任せて。
「シノン、レンジを保ちながら戦うぞ。おそらく一定以上離れると広域ブレスを発動するから。後ろの奴らを巻き込んじまったらアウトだ」
「了解、≪ナミング≫は？」
「キリトによると≪ナミング・デトネーション≫、インパクトの上位互換だ。ただ範囲が広くなっただけだから、回避はいつも以上に慎重に」
「ＯＫ、タイミングは任せたわよ」
今日という日を、あと少しで乗りきるために最後の集中力を発揮する。最初の≪ナミング≫をうまく回避して、全力≪ホリゾンタル≫と≪ファッドエッジ≫で数メートル吹き飛ばす。
「勝負だ！」

▽

通常攻撃は基本〝叩きつけ〟意外にない。尻尾も器用に使っては来るが、それは後ろに回った時だけ。

「はぁあああ！スイッチ！」

「せあ！」

ボスのパンチを横に受け流しながら〝相棒〟が攻撃を仕掛けてくれる。実に頼もしいかぎりだが、そろそろ二人組も限界か。レンジを取りながらの戦いはジリ貧であり、一発でも受けたら即窮地なので集中力も切れそうだ。今日は二回ほど窮地に陥り、戦いを制してきたので、そろそろ交代を…

そこで、やっとこ俺たちが迷宮区に置いてきた助っ人が追いつく。

「すみません！遅れました！」

「来たか、ネズハ！」

彼こそが今日の最強の助っ人、≪円月輪（チャクラム）≫使いのネズハだ。迷宮区を一人踏破していた彼は器用にチャクラムを扱い、Ｍｏｂをなぎ倒していた。

『僕に償いのチャンスをくれた人たちにお礼がしたいんです』

そう語り聞かせてくれたネズハは（あまり〝償い〟の部分は気にしない）なんと鍛冶職を捨ててまでスキル獲得のために、この3日間修行をしていたのだそうだ。

その意気やよし！と言うように「一緒に行こう」と誘ったのはコッチだったのだが、足の速さが違うのと、俺たち二人があまりにも焦っていたということもあり、はぐれて（意図的）しまったのだ。

「ネズハだと!?」

「ネズハ？」

と、後ろからワラワラ聞こえるが気にしない。

「あの額の王冠だ！目が光った時にチャクラムをぶつけてブレスをディレイしてくれ！」

今日2番目くらいの声を張り上げてネズハに聞こえるように叫ぶ。

「ハイ！」

ネズハの投擲したチャクラムは吸い込まれるようにして王冠にあたる。すると、今にも〝叩きつけ〟をしようとモーションを取っていたキングの動きが止まる。これで、ブレス対策は大丈夫そうだ。

「今度は僕がギリギリまで引きつけます！それまで、態勢を立て直してください！」

なんていい奴なんだ。お言葉に甘えて、シノンには視線で同意を得て、壁際に近寄り、

ポーションを飲む。すると、麻痺が解けたキリトたちが近付いてくる。
「いや、本当にすまんかった。今回は二人に迷惑かけちまったな」
「いいよ、エギル隊のところに今回は入れさせてもらったから。ところで、いつネズハと知り合ったんだ?」
「ついさっき。迷宮区でＭｏｂ相手に善戦してたから攻略組なんだろうな、と」
「そう、じゃあネズハさんは3日であのクエストをクリアしたんだね」
訳知り顔でキリトとアスナが話してくれる。なにがアイツにあるのかは知らんが、今この場において強力な助っ人であることには間違いない。
「どうせ、あのチャクラムをあげたのはお前らなんだろ?」
「よく分かったな」
「そりゃ、あんなレアアイテム。それこそＬＡボーナスだろ?ならお前しか持ってる奴いないじゃないか」
「さいですか」
「それにしても、私たちがクエスト攻略している間に色々あったみたいね。それこそ一筋縄でいかないような。ごめんなさいね、こっちもなかなか手強いクエで」
「でも、分かったことがある。必ず各層は、βのボスと相違があり、それを解くクエストは必ず存在する。これからはきっと」

「そういうクエストをクリアしてからフロアボス討伐になるだろうな」
　4人は同時に溜め息を吐く。攻略ペースは今でこそ早いが、これからはそのペースも落ちていくであろうと。この先は長い。
　しばらく沈黙、気を取り直すようにキリトがしゃべる。
「そろそろ、みんな回復して戦闘に参加し始めたな」
「ちなみに私たちは、またもやH隊だから、最後のローテね」
「ちなみに今戦っている部隊は？」
「G隊ね。名前はレジェンド・ブレイブス。装備だけなら一級品だけど」
「アスナ…それ以上は今は」
「うん…そうだね。ごめんね？今のは聞かなかったことにして？」
「？」
「うし、それじゃ立ち上がれよ、アキ、シノン。もうそろH隊だ。相手のHPも残り少ない。悪いがLAは貰っていくぜ！」
「あ！待ってよ！」
　勢いよくキリトとアスナは飛び出していく。ずるい！
「俺らも行くぞシノン！今日はあまり参加できてないせいで経験値も稼げてないしな！」

「行くのはいいけど…その動機は、嘘でも違うこと言っといた方がいいと思うわよ?」
「乗り気じゃない!?…いいんだよ、俺だってβテスターなんだし、少しは我儘させてもらわなきゃな!行かないなら俺が貰ってくるぜ!」
「行かないとは言ってないでしょ!」
俺たちも後を追ってダッシュそして、前線で指揮を執るリンドの横をすれ違ったところで、彼から指示が出る。
「よし!G隊、後退!H隊、進行!」
もう先に行ってる奴いるけどな、とは言わないが命令違反して少し速めに出ちゃったのH隊4人組。キリトとアスナがジャンプしようと身を目の前でかがめている。
チャンス!!シノンに作戦を耳打ちして呆れられるが同意を得た。どんどん二人してキリトの背中に近づいていき
「行くぞ!アスナ!遅れr…むぎゅう!」
「キリト君!?」
「今回は…!」
「LAは貰っていくわね!」
見事、アニメみたいな声を出したキリトの肩を片方ずつ土台にさせていただく。キリトのジャンプしようとする運動エネルギーと自らの筋力値を加算して飛んだジャンプ

は丁度≪アステリオス・ザ・トーラスキング≫の顔面間近に接近。
　そこから繰り出すのは、一度はあきらめかけていた≪空中ソードスキル≫。
「今だ、シノン！」
「了解！」
「「はぁあああ！」」
　繰り出したのは突進系ソードスキル≪ソニックリープ≫。一層でキリトがして見せた技だ。密かに練習していたのはシノンですら知らない。はずなのにシノンは見事この離れ業を感覚とセンスだけでやってのけた。
　同時に放ったソードスキルは綺麗なライトエフェクトの軌跡を残し、王冠を額ごと打ち破って見せた。キングはラグり始めたかと思うと、フィールドいっぱいのエフェクトを撒き散らして四散。その中心には二人の相棒の姿があり、二人は拳をぶつけ合わせて、こう呟くのだった。
「「今日も一日お疲れ様〝相棒〟」」